

延岡市文化財調査報告書Ⅲ

1. 延岡の歴史的環境
2. 赤木遺跡
(発掘調査概要報告)
3. 多々羅遺跡

1987

延岡市教育委員会

延岡市文化財調査報告書

(III)

1987

延岡市教育委員会

序

この報告書は、昭和60年度に実施したなるたき保育園建設にともなう舞野町赤木遺跡と昭和61年度に実施した舞野町多々羅遺跡の発掘調査記録です。

調査の結果、赤木遺跡からは旧石器時代の遺物、多々羅遺跡からは箱式石棺1基が検出されました。本書が学術資料として、また、社会教育、学校教育の資料として広く活用していただければ幸いです。

尚、本書の刊行にあたり、現地調査から報告書発刊まで御苦労いただきました県文化課の永友良典・近藤協氏をはじめ、調査協力いただいた橘昌信・柴田喜太郎氏に深甚の謝意を表するとともに、上南方福祉会および延岡史談会、まがたま会、ひみこ、かがり火などの会員や市民の方々の積極的な御協力に対し、厚くお礼申し上げます。

昭和62年3月31日

延岡市教育委員会

例　　言

1. 本書は、延岡市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 掲載しているのは、延岡市の歴史的環境のほか、旧石器時代の赤木遺跡と箱式石棺の多々羅遺跡の2件である。
3. 各遺跡の調査期間と調査担当者は下記のとおりである。

赤木遺跡	昭和60年4月30日～6月8日	永友良典（県文化課主任主事）
多々羅遺跡	昭和61年6月4日～6日	近藤 協（県文化課主事）
4. 各執筆は下記のとおりである。

延岡市の歴史的環境、多々羅遺跡	近藤 協
赤木遺跡	渡辺博吏、永友良典

目 次

1. 延岡市の歴史的環境	1
2. 赤木遺跡	5
(発掘調査概要報告)	
3. 多々羅遺跡	56

延岡市の歴史的環境

延岡市の歴史的環境



延岡市周辺遺跡位置図

1. 南方古墳群 2. 延岡市古墳 3. 愛宕山洞穴
4. 片田貝塚 5. 沖田貝塚 6. 大賀貝塚 7. 野田
町八田遺跡 8. 高野貝塚 9. 貝の畑遺跡 10. 莓田窯
11. 小峰窯 12. 林遺跡 13. 舞野遺跡

延岡市の歴史的環境

延岡市街地の大半を占める沖積地は、それぞれ延岡港で合流して日向灘にそそぐ3本の河川、北川(きたがわ)、祝子川(ほうりがわ)、五ヶ瀬川(ごかせがわ)によって形成されたもので、それらの河川はまた河口付近において複雑に流路を変えつつ大小の三角州やラグーンを形成して現在に至っている。

沖積平野部、すなわち現在の市街地には、城山(標高53m)、愛宕山(標高251.2m)に代表される独立山丘の他、舌状に河口に向って延びる丘陵が多くあって、繩文海進の頃には、この城山、愛宕山は海上に浮かぶ孤島となり、舌状丘陵には海が複雑に入りこんで、リアス状の海岸線を形造っていたことを窺わせている。

五ヶ瀬川は、西は熊本、大分両県境の九州山地に源を発して、高千穂町、日ノ影町、北方町と順次東流して日向灘に至る県北随一の河川であり、流域に各時代の文化を育んでいる。

五ヶ瀬川の上・中流域は、日ノ影町出羽洞穴^{出羽}、北方町岩土原遺跡^{岩土原}などに代表されるように県下では有望な旧石器遺跡の所在地であり、県中・南部に広がる洪積台地上の概知遺跡とともに県内の旧石器遺跡を代表するものとなっている。延岡市周辺部の旧石器時代の遺跡は、今回の赤木遺跡が本格的な発掘調査としては初めて行なわれたもので、それまでは剥片の表採地として、やはり赤木遺跡近辺に位置する今井野、舞野、細見地区等が知られているにすぎなかった。

付近一帯は赤ホヤ火山灰層(B. P6,000~6,300年)のほか、AT一始良・丹沢火山灰層(B. P21,000~22,000年)も明瞭に観察され、層位的条件としては申し分なく、より古い段階の旧石器時代遺跡も期待できる。

その他、旧石器時代の遺跡として特記されるのは、延岡市南部に位置する沖田川(おきたがわ)の支流である井昔川(いがえがわ)下流の低丘陵端部(標高6~8m)に位置する林遺跡^林において出土したナイフ形石器、台形様石器、石刀、石核で、それは赤木遺跡出土の旧石器^{赤木}に先行するものであり、その立地の対照的なことは検討すべきものを含んでいる。

繩文時代のこの地域を代表する遺跡に貝塚がある。大賀町の五ヶ瀬川北岸にせりだした低段丘上にある大賀貝塚は押型文土器、塞ノ神式土器を獸骨とともに貝層中に混えており、繩文早期~前期に営まれた貝塚として、宮崎市所在の跡江貝塚^{跡江}、柏田貝塚^{柏田}とともに著名である。

大賀貝塚は、現在でも発見当時の地形をほとんどそのまま残しておりよく保存されている。他に愛宕山の南西麓には沖田貝塚(繩文後~晚期)、南麓に片田貝塚(繩文後期)、愛宕山東北洞穴内貝塚(繩文後期)^内が、古城町の県立延岡高等学校の西側丘地には古城貝塚(繩文・時期不詳)^{古城}が所在した。いずれも繩文海進期に相前後して営まれた貝塚の典型をこの地に見ることができる。

弥生時代遺跡の発掘例は少ないが、昭和41年に調査された貝の畠遺跡や昭和53年調査の野田町八田遺跡からはそれぞれ一軒の隅丸方形プランを有する竪穴住居址が検出されている。²⁰¹⁹ その他近辺では、遺構の検出はみていないが弥生土器片が多数出土した荒田遺跡がある。現在延岡市街地となっている沖積地には恒富町本村遺跡、祝子遺跡等の若干の遺物を出土、あるいは散布する地点はおさえられているものの、遺跡の性格を把握しうるほどの本格的発掘が行なわれた弥生時代の遺跡はない。延岡市社会教育センター資料室所管の遺物のなかには有溝石庵丁(古川町出土)、杓子状土製品(市内出土)、あるいは脚部に2段の矢羽根透を施して口縁部に数条の凹線をもつ高杯、同じく口縁に四線を施した把手付無頸壺(2点とも三須町出土)等の、瀬戸内系の外米系土器のような希少な遺物が含まれていることを考えあわせれば、この地域の弥生文化初源の時期やその波及の経路等明らかにすべき課題が多い。

五ヶ瀬川が二つに分流して、その一本が大瀬川となる分岐点に位置する、天下町、野地町、野山村、大貫町地区は低丘陵が市街地に向って広がるところで国指定史跡南方古墳群の主な分布地域である。南方古墳群は他にこの地区より西に少し離れた丘陵上、舞野町に数基所在している。このうち大貫地区に所在する全長49mの前方後円墳である淨土寺山古墳(39号)からは短甲、冑、鐵鎗、鉄劍(蛇行劍を含む)等の副葬品が主体部の粘土郷内から出土している。またこの大貫町には県内の古墳群でも鬼の窟古墳(西都原古墳群)、千塚古墳とともに希有な横穴式石室を有する24号円墳も所在する。南方古墳の一つの特色は五ヶ瀬川流域一帯に産出する阿蘇溶結凝灰岩製の石棺が発達していることで、舟形や長楕形の刳抜式石棺、箱石棺等バラエティに富む。

延岡市街地の北、祝子川(ほううりがわ)と北川(きたがわ)間の沖積地上に位置して、稻葉崎町、櫛山町、栗野名町、無鹿町、大武町、大門町にまたがって広がる南北に細長い丘陵上や、近辺の沖積地には延岡古墳群(19基)²⁰²⁰の主体が分布している。他に市街地中心部近くの岡宮、恒富、三須地区に数基づつある。また前述の林遺跡の南西丘陵、上伊形町越路(こえじ)からは滑石製の子持勾玉が出土している。

五ヶ瀬川の北岸にあって丘陵が複雑に入りこむ古川町、小峯町、舞野町には古代、近世に営まれた窯跡がある。古川窯、苅田窯はいずれも須恵器窯跡で、苅田窯跡は10世紀中頃に営まれた半地下式無段登り窯の形態をとる。近世に肥前系磁器の影響下に営まれた小峯窯は日用陶磁器を中心に生産した窯であるが、その流通域は明らかではない。

- 註(1) 鈴木重治「出羽洞穴の旧石器」『考古学ジャーナル』1967
鈴木重治「宮崎県見立出羽洞穴」『日本の洞穴遺跡』平凡社1976
- (2) 鈴木重治「宮崎県岩土原遺跡の調査」『石器時代第10号』1973
- (3) 昭和61年度宮崎県教育委員会調査、未報告。土々呂バイパス建設工事に伴う発掘調査
- (4) 田中熊雄「大貫貝塚の研究(一)」『宮崎大学学芸学部紀要』第4号
- (5) 鈴木重治「宮崎市跡江貝塚の調査」日本考古学協会第31回総会研究発表要旨昭和40年
岩永哲夫「跡江貝塚再考」えとのす31、古代日向人の生活空間1、新日本教育図書 1986
- (6) 浜田耕作「柏田直純寺の貝塚」『宮崎県文化財調査報告書第10集』昭和40年
- (7) 石川恒太郎「宮崎県の考古学」郷土考古学叢書 昭和10年
- (8) (7)に同じ
- (9) 烏居竜蔵「上代の日向延岡」昭和43年、(7)に同じ
- (10) (7)に同じ
- (11) 石川恒太郎「貝ノ畠遺跡」『第二次日向遺跡総合調査 第二・三輯』昭和42年
- (12) 日高正晴、田ノ上哲、北郷泰道「野田町八田遺跡」延岡市教育委員会 1987
- (13) 石川恒太郎「延岡市琴塚の箱式石棺」『宮崎県文化財調査報告書』第14輯 昭和44年
石川恒太郎「延岡市古川町剝抜石棺の遺物」『宮崎県文化財調査報告書』第14輯 昭和44年
石川恒太郎「延岡市友内山箱式石棺」『宮崎県文化財調査報告書』第16集 昭和47年
石川恒太郎「熊野江積石塚第6号発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第22集 昭和55年
石川恒太郎「延岡市櫻山古墳群調査報告書」昭和46年
- (14) 小田富士雄「延岡市苅田窯跡」『宮崎県文化財調査報告書』第26集 昭和58年
- (15) 「延岡小峯窯址」郷土文化研究所 1964

赤木遺跡

(発掘調査概要報告)

例　　言

1. 本書は、上南方福社会の保育園建設に伴い、延岡市教育委員会が事前に実施した埋蔵文化財調査の概要報告書である。
2. 当遺跡の発掘調査は県文化課主任主事永友良典の担当で昭和60年4月30日から6月8日まで実施した。その整理は昭和60年度及び61年度、報告は昭和61年度に行った。
3. 発掘調査の際の遺構等の実測は永友良典が行い、写真撮影は永友と渡辺博吏が行った。遺物の整理は渡辺・永友・帖左広子・橋口和歌子、遺物の実測は永友・戸高真知子・松岡良一・近藤協がそれぞれ行った。また遺物・遺構等の整図と遺物の写真撮影は永友が行った。
4. 本書の執筆は、第1章を渡辺が行い、その他を永友が担当した。編集は永友が行った。
5. 本書で使用した方位は磁北で、レベルは海拔高である。
6. 出土遺物は延岡市教育委員会で保管している。

本文目次

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯	5
第2節 調査の組織	5
第3節 調査の概要	6

第2章 遺跡の概要

第1節 遺跡の立地	8
第2節 遺跡の歴史的環境	10
第3節 包含層の状態	14

第3章 調査の成果

第1節 旧石器時代の遺構・遺物	19
1. 赤木第I文化層	19
(1)配石遺構	19
(2)縄の分布	20
(3)出土遺物と分布状況	23
(4)まとめ	33
2. 赤木第II文化層	35
(1)縄の分布	35
(2)出土遺物と分布状況	35
(3)まとめ	40
第2節 繩文時代の遺物	43
第3節 古墳時代の遺物	43
第4章 結語	44

挿 図 目 次

第1図 調査区域図	7
第2図 位置図	8
第3図 遺跡周辺地形図	9
第4図 五ヶ瀬川流域の旧石器遺跡分布図	10
第5図 旧石器時代遺跡分布図	11
第6図 基本土層図	14
第7図 土層図	15~16
第8図 土層図(試掘トレンチ)	17
第9図 配石遺構実測図	20
第10図 遺物分布図(礫…赤木第I、第II文化層)	21
第11図 遺物分布図(石材別…赤木第I文化層)	22
第12図 石器実測図(第I文化層-1)	24
第13図 石器実測図(第I文化層-2)	25
第14図 石器実測図(第I文化層-3)	26
第15図 石器実測図(第I文化層-4)	27
第16図 石器実測図(第I文化層-5)	29
第17図 石器実測図(第I文化層-6)	30
第18図 石器実測図(第I文化層-7)	31
第19図 遺物分布図(接合資料-赤木第I文化層)	32
第20図 遺物分布図(石器-赤木第I文化層)	34
第21図 遺物分布図(石材別-赤木第II文化層)	36
第22図 遺物分布図(細石器-赤木第II文化層)	37
第23図 石器実測図(第II文化層-1)	38
第24図 石器実測図(第II文化層-2)	39
第25図 繩文時代出土遺物	43
第26図 古墳時代出土遺物	43

表 目 次

表1 旧石器時代遺跡地名表	12~13
表2 石器計測表(1)	41
表3 石器計測表(2)	42

図 版 目 次

図版1 1. 遺跡遠景(北から) 2. 遺跡遠景(南から) 3. 遺跡近景(南側)	46
図版2 1. 遺跡近景(北側22号墳) 2. 発堀調査区全景(北東側から) 3. 遺物出土状況(3-cグリッド)	47
図版3 1. 遺物出土状況(2-a~2-bグリッド) 2. 遺物出土状況 (3-a~3-bグリッド) 3. 配石遺構検出状況	48
図版4 1. 発堀調査風景 2. 発堀調査風景 3. 作業員・協力者のみなさん	49
図版5 1. 遺物出土状況(2b-605) 2. 遺物出土状況(2b-7) 3. 遺物出土状況(2b-3)	50
図版6 第I文化層出土遺物	51
図版7 第I文化層出土遺物	52
図版8 第I文化層出土遺物	53
図版9 第II文化層出土遺物	54
図版10 第II文化層・縄文時代・古墳時代出土遺物	55

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

昭和59年7月、延岡市福祉事務所より市教育委員会に対して、延岡市舞野町1477-10（佐藤守氏所有の土地）における保育園建設計画に関する文化財の有無の問い合わせがあった。市教育委員会では、当地が国指定史跡南方古墳群第22号墳の隣接地でもあり、付近一帯が以前より埋蔵文化財包藏地として知られていることから、県文化課に依頼して昭和59年8月に分布調査を実施した。当地は隣接地の指定地より、1.5m程削平されてはいたが、分布調査の結果、須恵器片3点と剝片2点が採集された。そのため、市教育委員会では県文化課に依頼して、昭和59年9月17日から22日の6日間、試掘調査を実施した。調査の結果、古墳関連の遺構等は検出されなかったが、細石核2点を含む200点余りの旧石器の剝片が出土し、一帯に良好な旧石器時代の包含層が存在することが判明した。

試掘調査の結果により、事業者である上南方福祉会と遺跡の保存について数回にわたって協議をおこなったが、現状保存は困難なため、工事着手前に発掘調査をおこなって、記録保存の措置をとることになった。

発掘調査は、上南方福祉会の依頼により延岡市教育委員会が調査主体となり、県文化課永友良典主任主事の担当で昭和60年4月30日から6月8日までの間実施した。

第2節 調査の組織

調査主体

延岡市教育委員会

教　育　長	松坂敷男
社会教育課長	松浦良雄（60年度）積島誠生（61年度）
課長補佐兼社会教育係長	年森弘光
文化財担当主事	渡辺博吏
市社会教育センター館長	甲斐常美
調　査　員	永友良典（県教育庁文化課主任主事）
調　査　補　助　員	松岡良一（現佐土原町立佐土原中学校教諭） 帖佐広子（現緑ヶ丘学園高等学校講師） 早瀬裕二
特　別　調　査　員	橋　昌信（別府大学教授） 柴田喜太郎（広島大学理学部地質学鉱物学教室）
調　査　協　力	近藤　協（県教育庁文化課主事） 日高孝治（県教育庁文化課主事）

調査参加者

大村環、甲斐清太郎、河野重喜、小島博之、白石征八郎、瀬川澄雄、白石義光、
田島亥上男、加藤宏、松本尚、谷川良宣、寺田稔、馬崎豊、町田寿、山崎土松、
松本茂、柳田寿美蔵、矢野春一、林田房治、今田清一、岩切正一、小川勝、柳田
今朝治、大槻勝子、加藤幽香子、河野中子、山崎力子、谷山幸子、西山京、花岡
ハル子、宮田コマ、山崎美美子、森岡暁子、小嶋かず枝、甲斐博子、萬田スマ子、
吉岡澄子、江崎ツヤ、富山錦江、堀田サエ、甲斐光子、崎川ミヨ子、山下征子、
柚木絹子、恵良靖子、小野キミエ、中川和子、長坂久子、山崎朝江、安元喜久子、
矢倉美智子、宮田絹江、佐藤フクエ、清田フクエ、吉田千鶴子、年森フキ子、竹
内愛子、阿南ヤヨイ、黒岩春子、北代しげ子、菅君代、宮園サヲ、佐藤房江、山
田ヒロ子、内田銀子、内田義輝、河野節子、大石カネ子、松田セツ、藤村静子、
小鏡治正子、宮口公子、塙月静、吉田トミエ、矢野美喜子、小島小夜子、樋口テ
ツ子、馬場八重子、城後リツ子、杉本芳野

(延岡史談会、まがたま会、ひみこ、かがり火、他)

調査作業員

鶴島保子、甲斐小弥太、甲斐由夫、児玉つや子、田島久、田中義一、土持徳馬、
西田義則、浜田ミヨカ、福崎和臣、森茂、柳田フジ

第3節 調査の概要（第1図）

調査地点は舌状に東に延びる台地の南縁辺にあり、南東方向の開析谷へと緩やかに傾斜する地点に位置する。

調査対象区は約1500m²であるが、戦前に開墾されておりほぼ平坦な畑地となっている。特に、北側は隣接地より1.5m程度削られている。

調査区の北側には南方古墳21号墳～23号墳の所在する雑木林と植栽林があり、さらに道路を隔てて畑が広がり水田地帯へと下っていく。

東側は開析谷へと緩やかに落ちていくが調査区よりさらに2m以上も削られている。

南側も開析谷へと落ちていくが開墾の際に削った土を傾斜地に土盛し平坦に成形している。

西側には人家ができるが周辺は畑となっており西に広がる台地へと続く。

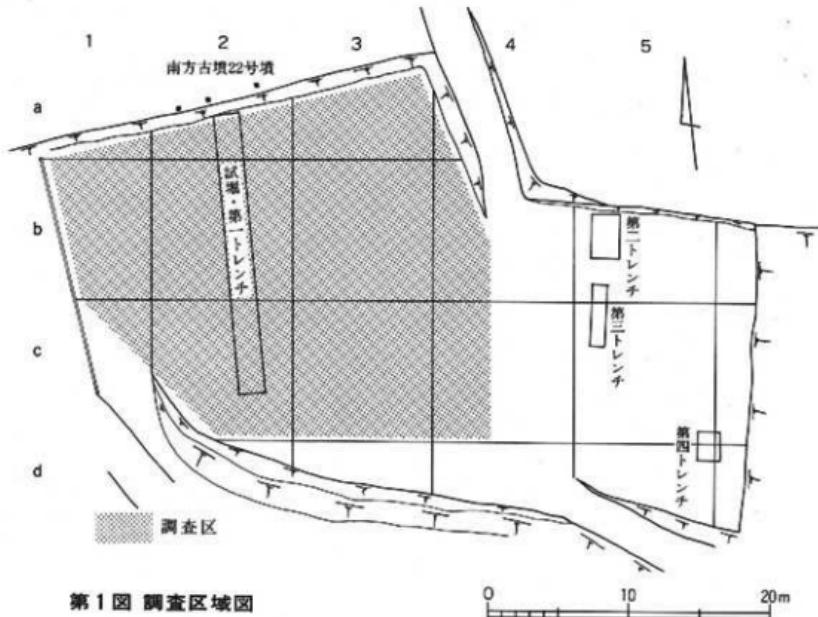
試掘調査では、四箇所にトレーンチを入れた結果、西側の第1トレーンチでは北側でⅦ層（A T層）近くまで、また、南側ではⅥ層（アカホヤ層・下層）～Ⅴ層まで削平されており、南側では開墾時の盛り土がかなり堆積していた。遺物はⅤa層下位～Ⅴb層上位で細石核2点のほか、約100点の剝片が出土した。東側の第2・第3トレーンチでは、Ⅵ層下位～Ⅴa層上位にかけて削られている。遺物はⅤb層の下位から約100点の剝片が出土したが、表土から約70～80cmの深さに包含層が確認できた。南側の第4トレーンチでは開墾の際の盛り土が1m近くも確認できた。

今回の調査は、保育園建設に伴うもので建物部分以外は掘削せずに盛り土工法をとることから、工事対象面積約1500m²の内建物部分の約400m²について発掘調査を実施することとした。調査の方法としては、磁北をもとに、調査対象区全面に10mグリッドを組み、50cm幅のベルトを残すかたちで行った。グリッドは、たて方向a、b、c…、横方向1、2、3…、と示した。

調査の結果、第V層にAT層（姶良Tn火山灰）が確認され、Va層下位～Vb層上位とVb層下位層から網石器群とナイフ形石器群の二つの旧石器文化層が検出された。しかし、北側では削平が著しくVb層上位まで削られており遺物の混入も考えられる。また、南側の傾斜地盤でもVa層上位まで削平を受けていた。なお、二つの文化層とも焼け石の散乱が見られ、Va層からは配石遺構1基が検出された。

旧石器時代以降の遺構・遺物としては、調査区が既にアカホヤ層まで削られているため、遺構の検出はなかったが、縄文早期の土器片1点と石鐵2点、さらに、古墳時代の須恵器片数点の遺物が出土した。

なお、調査方法と旧石器遺物については別府大学教授橋昌信氏、また、火山灰については広島大学理学部地質学鉱物学教室柴田喜太郎氏にそれぞれご指導をいただいた。さらに、調査期間中、延岡史談会をはじめ、郷土史婦人学級のOBにより結成された“まがたま会”“ひみこ”“かがり火”的会員の方々には奉仕作業で調査に協力いただいた。



第1図 調査区域図

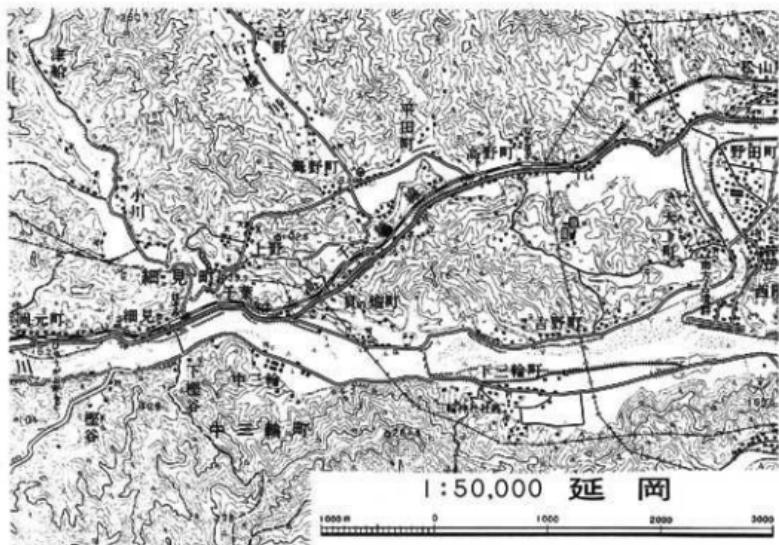
第2章 遺跡の概要

第1節 遺跡の立地（第2図・第3図）

赤木遺跡は、延岡市舞野町に所在する旧石器時代の遺跡で、五ヶ瀬川下流域の左岸丘陵端に広がる小台地上に立地する。

五ヶ瀬町延岡の山地を源とする五ヶ瀬川は、高千穂町から日之影町の阿蘇溶結凝灰岩地帯を複雑に蛇行しながら東流する。やがて、下流の北方町と延岡市との境付近から直流しはじめて沖積平野である延岡平野へと流れ込む。沖積平野へ入ると天下町付近から大瀬川と分かれて北へ大きく蛇行する。そして、大きな中洲（川中）を形成して再び大瀬川と河口付近で合流する。その間、祖母・領山系を主として多くの支流が五ヶ瀬川へと流れ込んでくる。

遺跡の立地する丘陵は、行縢山から南にさらに東へと延びる丘陵で、五ヶ瀬川と大瀬川の分岐点の西に広がる。南には五ヶ瀬川の本流、北には支流であり、また、行縢山を源にする行縢川が流れる。この丘陵はさらに舞野町付近で丘陵を切断する形で行縢川に向かって開析



第2図 位置図

谷が北東に延びており、それに沿って北側に標高50m前後の細長い舌状の台地が形成されている。台地はさらに西に延びて貝の畠町付近では傾斜の緩やかな平坦面を形成している。北から東にかけては、比高差40m～45m下に行勝川に沿って水田地帯が細長く形成されている。東から南にかけては開析谷を隔てて標高100m～50mの丘陵が天下町付近まで延びており、この丘陵の南に五ヶ瀬川が流れる。

赤木遺跡は、舌状台地が東に延びる付け根部分付近の開析谷に面する緩やかな南斜面に位置する。

現在、この開析谷を利用し、さらに台地の端部を切断する形で、国道218号線と国鉄高千穂線が高千穂方面へと抜けている。



第3図 遺跡周辺地形図

第2節 遺跡の歴史的環境（第3図～第5図）

遺跡周辺の歴史的な環境を概略述べると、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が多い。遺跡の立地する舞野・平田・吉野・天下の丘陵から五ヶ瀬川を隔てた野地・野田・大貫一帯には国指定史跡南方古墳42基が分布する。このうち、遺跡周辺には6基の円墳が所在し、調査地点の北には22号墳、23号墳、21号墳の3基が隣接する。特に、23号墳からは組み合わせ式の石棺が出土している。また、18号墳付近と調査地の東側からそれぞれ箱式石棺が発見されている。さらに、調査地点から開析谷を隔てた東側の小台地には弥生時代の舞野遺跡が、また、南側の五ヶ瀬川沿いの台地上には弥生時代後期の豊穴住居跡を検出した貝の畠遺跡などが分布する。

縄文時代の遺跡としては、沖積平野に接した丘陵端を中心に縄文時代の貝塚などの分布が見られる。

旧石器時代については、以前から遺跡周辺の台地上でも下舞野周辺から石器などが採集されていたことから、遺跡の可能性が大いに考えられていた。

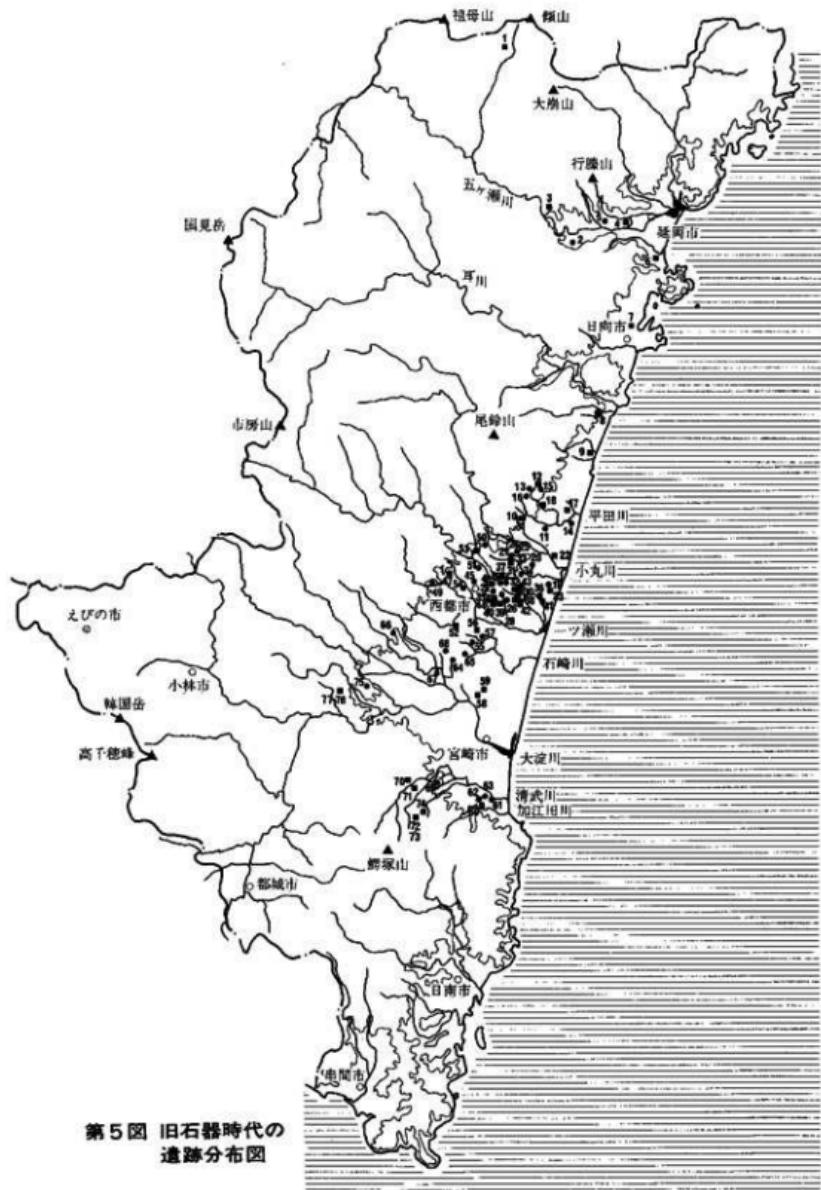
五ヶ瀬川流域は、県内でも宮崎平野について旧石器時代の遺跡の豊富な地域で、日之影町見立の出羽洞穴や北方町笠下の岩土原遺跡などの代表的な遺跡の外にも流域沿いの台地上数箇所で遺物の採集がなされている。また、沖田川沿いの延岡市伊形町林遺跡からはナイフ形石器などが出土している。

宮崎県内では現在78ヶ所で旧石器時代の遺跡が確認されている。

本県では、1960年代後半～70年代前半にかけて行われた出羽洞穴や岩土原遺跡、さらには佐土原町上那珂の船野遺跡等の発掘調査によって旧石器文化研究はスタートした。その後、大野寅夫氏による児湯郡下の旧石器時代資料の集収にみられるように、表採を中心とする蓄積がなされてきた。そして、1980年代に入り、宮崎学園都市遺跡群内の堂地西遺跡におけるAT層の確認とその上層での石器群の本格的な調査を皮切りに最近、各地で旧石器時代の



第4図 五ヶ瀬川流域の旧石器遺跡分布図



第5図 旧石器時代の
遺跡分布図

表1 旧石器時代遺跡地名表(1)

1986年12月現在

遺跡名	所 在 地	形 石 ナイ フ 器	尖 頭 器	尖 三 頭 器	石 台 器	縦 石 器	その他の遺物	遺 跡 構 出	備 考	文 獻
1 出羽洞穴	日之影町見立	○	○				標器、尖頭石器 削器、矛、敲器		1965~66 南九州最大発掘	1
2 岩土原	北方町笠下					○	鐵文土器		1969南九州大発掘	2
3 猿小屋	# 猿小屋		○							3
4 吉野	延岡市吉野	○								3
5 赤木	# 舞野町	○	○	○		○	敲器、標器 石核	配石	1985市発掘	
6 林	# 伊形町	○					石核、石刃		1986県発掘	
7 後陣	日向市日知原	○	○						1985市発掘	5
8 寺道	東郷町山塚甲	○				○				6.7
9 黒森	鶴見町川北	○					石核			6
10 白鷲	川南町川南字白鷲	○				○				6.7
11 番野地C	# 川南字番野地		○			○				6
12 旭ヶ丘	# 川南字旭ヶ丘・市納上		○							6
13 椎原	# 川南字椎原		○			○				6
14 大久保	# 平田字大久保	○				○				7
15 谷ノ口	# 川南字谷ノ口・纏ノ草					○			町路査	8
16 住吉B	# 川南字住吉					○			"	8
17 卒手	# 平田字卒手		○						"	8
18 楠風呂	# 川南字楠風呂						石刃		"	8
19 雲雀山	高鍋町南高鍋	○	○			○				6
20 中尾原	# 上江		○			○				6
21 小笠	# 上江						石核			6
22 持田中尾	# 持田	○	○				円形搔器		1981町発掘	9
23 豊道南	# 南高鍋	○					敲器		1985 "	10
24 牧ノ内	木崎町椎木						石核			6
25 陣ノ内	# 椎木		○			○				6
26 游宮	新富町新田字大溝・湯之宮	○	○			○				6
27 川床	# 新田字上深田					○				6
28 一丁田	# 新田字大溝	○				○				6
29 黒坂	# 新田字黒坂	○				○				6
30 湯風呂	# 新田字浦田		○			○				6
31 西桂原	# 新田字中別村鶴戸川		○			○				6.7
32 東桂原	# 新田字曾明寺	○				○				6.7
33 追分	# 新田字鶴戸・牛田	○				○				6
34 新山	高鍋町上江新山		○			○				6
35 祇園原	新富町新田字小原		○							6
36 木戸	# 日置字木戸						剥片	町路査	11	
37 鶴戸川	# 新田字鶴戸川						"	"	11	
38 丸尾B	# 新田字丸尾						石核	"	11	
39 山之坊上	# 新田字山之坊上						剥片	"	11	
40 新田原B	# 新田字新田原		○						"	11

	遺跡名	所 在 地	形ナ 石器フ	尖頭 器	尖三 頭器後	石台 器形	圓石器	その他の遺物	遺検 構出	備 考	文 獻
41	通 山	新富町三納代字通山						剥片		町教委踏査	11
42	平伊倉A	" 新田字平伊倉						"		"	11
43	音 明 寺	" 新田字音明寺						"		"	11
44	瀬 戸 口	" 新田字瀬戸口					○			1985町発掘	18
45	諫 訪	西都市上三財	○	○		○					6
46	撫 現	" 慶北		○							6
47	丸 山	" 三宅		○							6
48	大 口 川	" 右松	○	○		○					6
49	室 財 原	" 南方		○		○					6
50	東 原	" 慶北				○					6
51	車 木	" 慶北	○			○					6
52	荒 武	" 荒武		○							6
53	毘	" 慶北									6
54	松 本	" 清水	○			○					6
55	船 野	佐土原町西上郡河	○	○	○	台形様 (○)	○	搔器、削器、石斧 彫器、石核	配石	1970~72 別府大発掘	12
56	仲 間 原	" 上田島						石刀			4
57	久 保 山	" 上田島	○	○		○					6
58	垂水公園	宮崎市瓜生野		○							4
59	池内城塙	" 池内町		○							3
60	堂 地 西	" 猿野	○	○					集石	1984累発掘	13
61	前 原 西	" 猿野					○			1983 "	14
62	下 田 煙	清武町木屋	○							1985 "	15
63	田 上	" 木屋				○				1984 "	13
64	亀 の 甲	国富町三名	○	○		○					6
65	開 拓	" 三名		○							6
66	法 幸 岳	" 深谷				○					6
67	六 日 町	" 本庄				○					6
68	六 野 原	" 八代北俣				○					6
69	杏 挂	清武町今泉				○					6
70	萩 ヶ 潮	田野町	○								4
71	田 野	"	○								4
72	芳ヶ道1	"	○	○	○				集石	1983町発掘	16
73	芳ヶ道3	"		○				石核	"	1984 "	16
74	札 ノ 元	"					○	"	"	1984 "	16
75	二 反 / 原	高岡町五町				○					6
76	下 山 田 島	"	○								4
77	新 村	野尻町紙屋	○					搔器		1985町発掘	17
78	高 山	" 紙屋						剥片	集石	1985 "	17

包蔵地・散布地の調査が行われており、遺跡・遺物ともに急激な増加をみている。

遺跡の分布は大きく分けて、五ヶ瀬川流域を中心とする県北部と、宮崎平野を中心とする県中央部の2つに分けられる。県南部および県西部での確認はいまのところない。

遺跡の内訳は、包蔵地11ヶ所、散布地67ヶ所である。時期的には、前期旧石器の遺物を出土する遺跡（出羽洞穴第八層）1、ナイフ形石器や尖頭器等を出土する遺跡26、ナイフ形石器や尖頭器と細石器のみられる遺跡24、細石器のみの遺跡13を数える。ナイフ形石器や尖頭器のみられる遺跡については出土層の確実な遺跡ではいづれもA T層上位からの出土である。

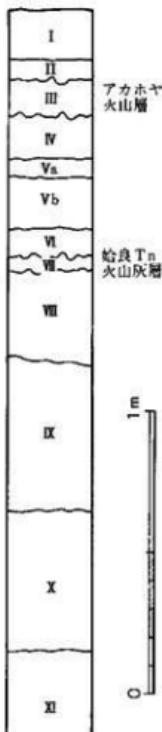
また、石材のうえから見ると、一部の細石器を除いて黒曜石を石材に用いたものはほとんどみられず、流紋岩・頁岩・砂岩等が多く用いられている。

第3節 包含層の状態（第6図～第8図）

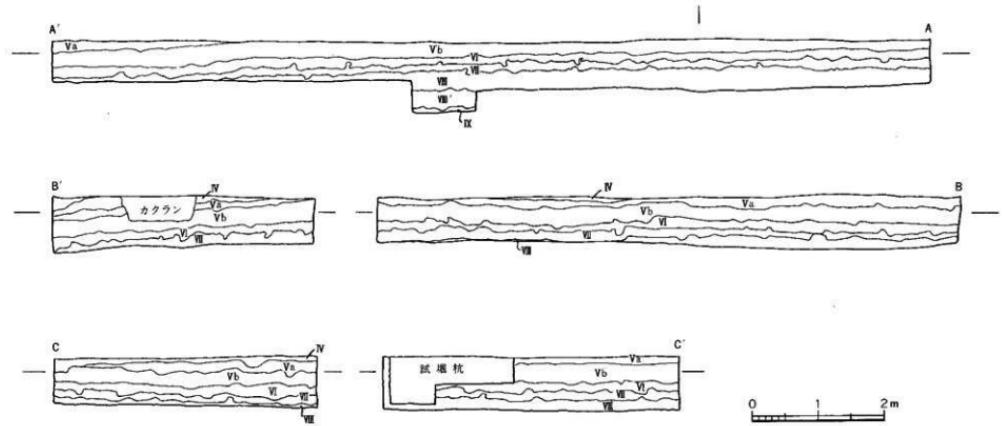
当遺跡では第VII層の始良Tn火山灰層を中心に8層を確認した。しかし、調査区はかなりの削平を受けておりVI層より上は既に削られている。そのため、北側の削平断面と同台地上で調査区から50m南西に行った国道沿いの3m近くの切り通し断面の土層を参考とした。基本層序は次の通りである。

- I層 耕作土（約30cm）
- II層 黒色土層（約20cm）
- III層 明褐色土層（アカホヤ火山灰層）。（約25cm）
- VI層 黒褐色土層：やや粘質を持つ。（約30cm）
- Va層 暗褐色土層：粘性を持つ。VI層→V層の漸移層。
(約10cm)
下位～Vb層直上にかけて細石器文化層。
- Vb層 茶褐色土層：粘性を持つ。下位に行くほどバミ
スの量が増す。（約40cm）
下位を中心としてナイフ形石器文化層。
- VI層 茶褐色土層：砂質を帯びる。（約20cm）
- VII層 黄褐色土層（始良Tn火山灰層）。（約10cm）
- VIII層 黑褐色土層：粘質土。3～5cm大のブロック状。
(約60～70cm)
- IX層 黄褐色土層：粘性を持つ。（約100cm）
- X層 黄褐色土層：砂質を帯びる。1～2cm角のブロ
ック状。（約100cm）
- XI層 黄褐色土層：粘性を持つ。

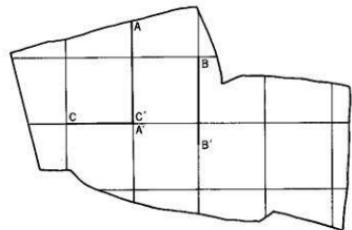
なお、火山堆積物については、柴田喜太郎氏に御教授
いただいた。



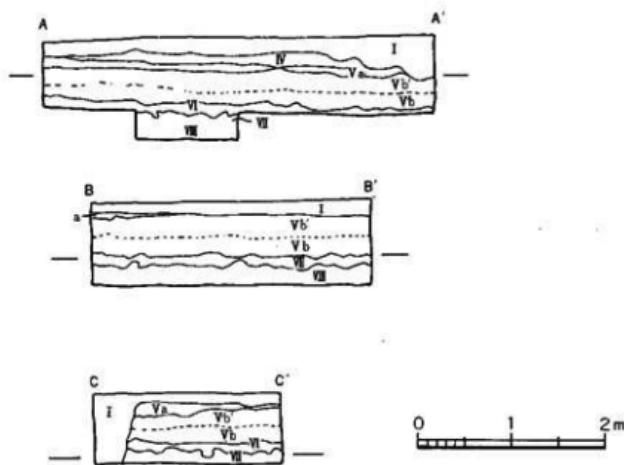
第6図 基本土層図



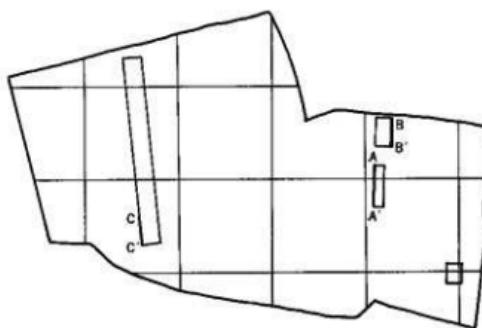
N層 黒褐色土層：やや粘性を持つ。
 V_a層 暗褐色土層：粘性を持つ。V層→V'層の遷移層。
 下位→V'層上にかけて細石器文化層。
 V_b層 茶褐色土層：粘性を持つ。下位に行くほどバミスの量が増す。
 下位を中心としてナイフ形石器文化層。
 VI層 茶褐色土層：砂質を含む。
 VII層 黄褐色土層（佐賀Tn大山灰層）
 VIII層 黒褐色土層：粘質土。3~5cm人のブロック状
 IX層 面よりブロックが多くなる。
 X層 黄褐色土層：粘性を持つ。



第7図 土層図



- V層 黒褐色土層：やや粘質を持つ。
- V_a層 暗褐色土層：粘性を持つ。VI層→V層の漸移層。
下位→V_b直上にかけて縄石器文化層。
- V_b層 茶褐色土層：粘性を持つ。下位に行くほどバキミの量が増す。
下位を中心としてナイフ形石器文化層。V_{b'}層はやや明るい。
- VII層 茶褐色土層：砂質を帯びる。
- VIII層 黄褐色土層（姶良Tn火山灰層）
- VI層 黒褐色土層：粘質土。3~5cm大のブロック状



第8図 土層図(試掘トレンチ)

宮崎県旧石器関係文献

- 1) 鈴木重治「出羽洞穴の旧石器」『考古学ジャーナル』1967
- 鈴木重治「宮崎県見立出羽洞穴」『日本の洞穴遺跡』平凡社1973
- 3) 山口謙治「宮崎市内採集の先土器時代石器—剥片尖頭器について—」『宮崎考古4号』1978
- 4) 二宮忠司「九州地方におけるナイフ形石器について」『考古学論叢1』1973
- 5) 日向市・日向市教育委員会「後陣遺跡・越シ遺跡」『亀崎土地区画整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1986
- 6) 茂山謙・大野寅夫「児湯郡下の旧石器」『宮崎考古3号』1977
- 7) 茂山謙「椎原型石核」『宮崎考古6号』1980
- 8) 川南町教育委員会「川南町の埋蔵文化財」『遺跡詳細分布調査報告書』1983
- 9) 高鍋町教育委員会「持田中尾遺跡発掘調査概要報告書」1982
- 10) 高鍋町教育委員会「妻道南遺跡発掘調査報告書」1986
- 11) 新富町教育委員会「新富町の埋蔵文化財」『遺跡詳細分布調査報告書』1982
- 12) 橋昌信「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢3』1975
- 13) 宮崎県教育委員会「堂地西遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集』1985
- 14) 宮崎県教育委員会「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報(Ⅲ)」1982
- 15) 宮崎県教育委員会「下田畠遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第3集』1985
- 16) 田野町教育委員会「県営農地開発事業前平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、芳ヶ迫第1遺跡・芳ヶ迫第2遺跡・芳ヶ迫第3遺跡・札ノ元遺跡」『田野町文化財調査報告書第3集』1986
- 17) 野尻町教育委員会「漆野原県営土場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報、新村遺跡・高山遺跡」『野尻町文化財調査報告書第1集』1986
- 18) 新富町教育委員会「瀬戸口遺跡」『新富町文化財調査報告書第3集』1986

第3章 調査の成果

第1節 旧石器時代の遺構・遺物

調査の結果、確認された旧石器時代の包含層は、基本層序の第Ⅳ層にあたる姶良Tn火山灰層を鍵層として、その上層にあたる第Ⅴb層（茶褐色土層）の下位と、第Ⅴb層（暗褐色土層）の下位から第Ⅴb層の上位にかけての2時期（二文化層）である。二文化層のうち、下層の赤木第Ⅰ文化層からはナイフ形石器を中心、三棱尖頭器等を含む石器群と配石遺構を含む焼穢群が検出された。また、上層の赤木第Ⅱ文化層からは細石核、細石刃を中心とした細石器群と、それに伴う焼穢群が検出された。しかし、削平により調査区のかなりの範囲において第Ⅱ文化層を構成する第Ⅴa層～第Ⅴb層にかけてのレベルまでカットされていたため、プライマリーな状態で第Ⅱ文化層の遺物を検出できた範囲は限られる結果となった。また、第Ⅰ文化層内でも部分的に第Ⅱ文化層の遺物の混在もあった。

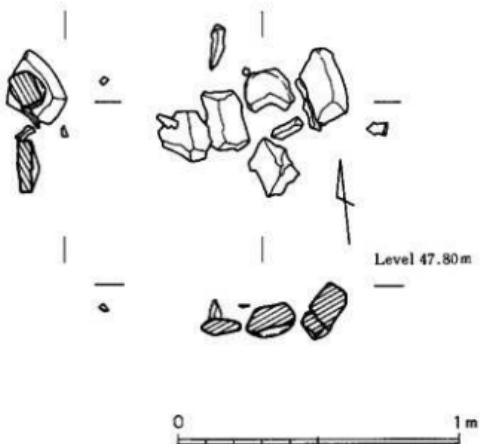
1. 赤木第Ⅰ文化層

赤木第Ⅰ文化層は、ナイフ形石器を中心とする文化層で第Ⅴb層の下位で確認された。Ⅴb層は鍵層となる姶良Tn火山灰層（Ⅵ層）の上層にあたり、茶褐色の極めて粘性に富んだ土層である。層の厚さは30～40cmと比較的の厚いが、遺物はⅤb層下位の厚さ約20cm程度に分布している。また、分布状況は調査区全域にまんべんなく分布しており、調査区の関係から特に2-b、3-b、3-cグリッドに集中する。なお、削平のため、1-a～3-aグリッド、1-b～3-bグリッドにかけては上層文化層の遺物の混在がみられたが、3-cグリッド付近では地形の傾斜から第Ⅱ文化層との間に明確な文化層のちがいを示している。

焼穢も、遺物の分布と同じ様相を示すが、3-cグリッドに検出され配石遺構を中心に2、3ヶ所で穢の小規模な集中がみられる。遺跡のひろがりは、地形の削平状況からみて調査区の北側一帯、および東側にのびる可能性がある。

(1)配石遺構（第9図）

検出された穢の分布状況から、2、3ヶ所で穢の集中地点などがみられたが、遺構としての形態を持つものとしては、配石遺構1基が検出された。配石遺構は調査区南側にあたる3-cグリッドの西側の標高47.6～47.7mの位置に所在し、第Ⅴb層下位を基底面としている。構成する穢は、20～25cm程度の人頭大の砂岩質の円穢と砂碎穢を主としている。表面は赤く変化し、岩質もろく、ひびの入ったものや、2～3個に割れた状態のものもある。人頭大の穢5個がほぼ東西方向に並んでおり、その周辺に小破碎穢4～5個が点在する。これらの小穢も赤変している焼穢である。分布の範囲としてはおおよそ80cm×60cmに及ぶ。配石遺構の基底面等に焼土の痕跡は確認されなかったが、スコリア状のものや炭化物は若干みられた。また、遺構に伴う掘り込みの痕跡は認められなかった。基底面は南～東にかけて傾斜してい

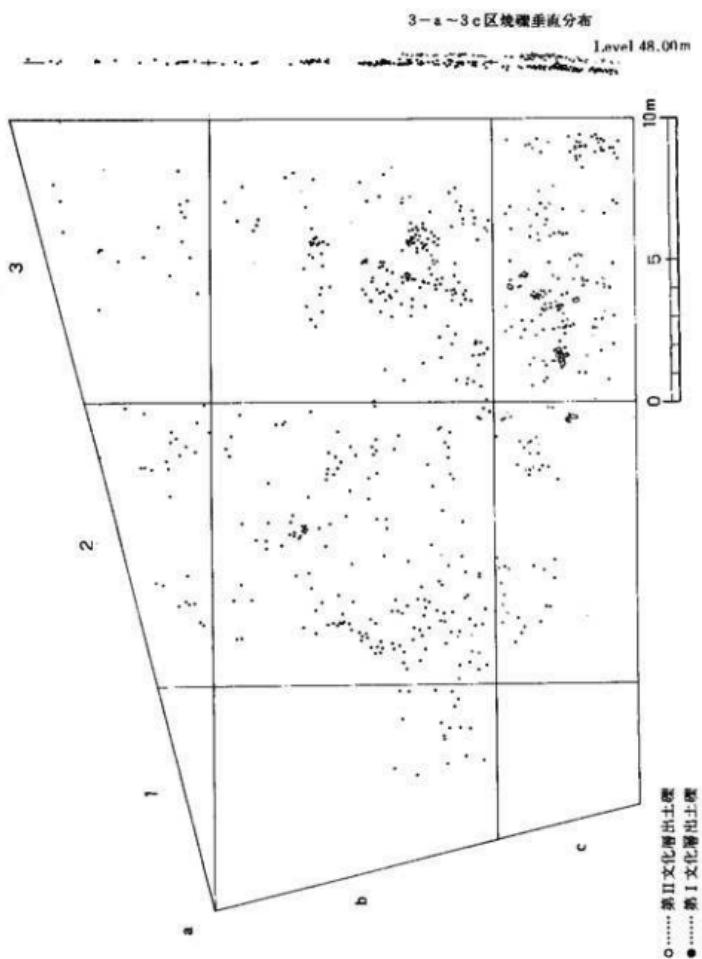


第9図 配石遺構実測図

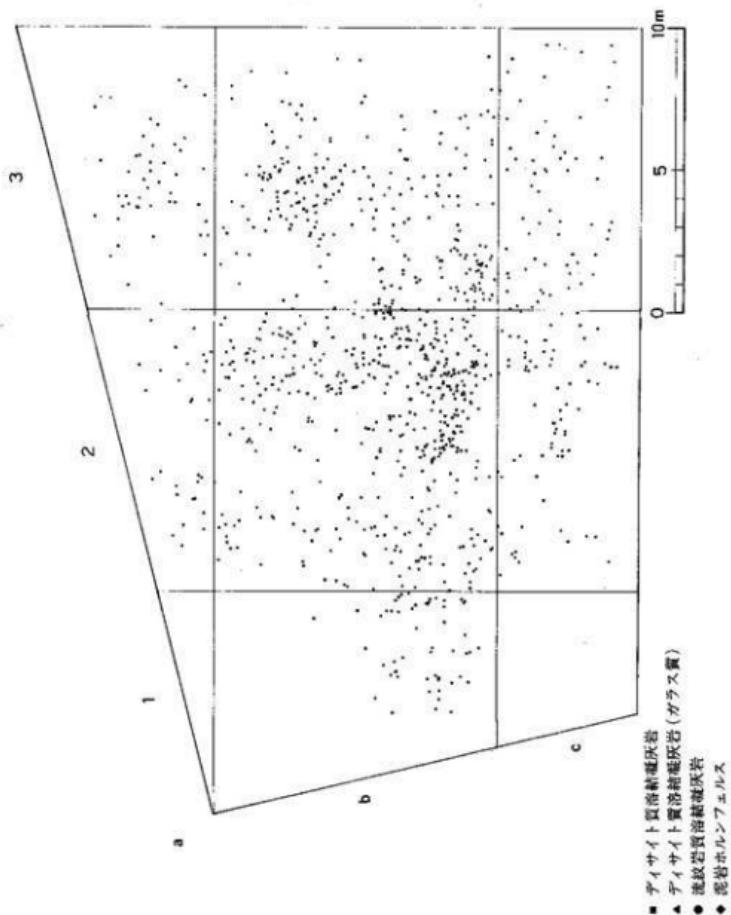
る。配石遺構の周辺からは石器類の出土はあまりみられず、2～3m離れた地点でナイフ形石器が2～3点分布する程度である。また、北西2～3mのところに、接合関係を持つ剥片等の集中箇所がみられる。

(2) 磨の分布（第10図）

第Vb層の下位からは調査区全域で約500点にも及ぶ多量の礫群が検出された。検出された礫群はその85%以上は拳大より小さな礫から構成されており、拳大程度の礫が10%前後、人頭大の礫が5%にも満たない。礫のはほとんどが火を受けて赤変しており、岩質もろい破碎礫である。礫の分布状況は、調査区全域に及ぶが、特に、配石遺構を中心に3-c～3-bグリッドにかけて礫の集中がみられる。



第10図 遺物分布図(縦……赤木第Ⅰ第Ⅱ文化層)



第11図 遺物分布図(石材別……赤木第I文化層)

(3)出土遺物と分布状況（第11図）

第Vb層下位で検出された石器群の総数は約1000点に及ぶ。そのうち、石器はナイフ形石器36点、剥片尖頭器3点、三棱尖頭器6点、スクレイバー1点、敲器3点の他に、二次加工のある剥片3点、使用痕のある剥片24点、石核14点を数える。石材は石器群全体では、ディサイト質溶結凝灰岩（約750点、うち、ガラス質のものが約550点）、泥岩ホルンフェルス（約210点）流紋岩質溶結凝灰岩（約130点）と3種類の石材が大多数を占め、砂岩（約10点）もわずかにみられた。石器の石材別数量は、ディサイト質溶結凝灰岩（15点、うちガラス質のもの10点）、泥岩ホルンフェルス（6点）、流紋岩質溶結凝灰岩（13点）、砂岩（2点）、である。

ナイフ形石器（第12図～第14図）

出土した36点のナイフ形石器の石材は、ディサイト質溶結凝灰岩12点、同（ガラス質）9点、泥岩ホルンフェルス4点、流紋岩質溶結凝灰岩10点、砂岩1点である。これらのナイフ形石器を素材や加工のうえから下記のとおり分類ができる。

A類 縦長剥片を素材とする二側縁加工のナイフ形石器。（1～6）1は柳葉状の典型的な「九州型」の石器。2、4は斜直線的な刃部を有する。4では基部が折れた後に再生した痕跡がみられる。

B-1類 「切出し形」のナイフ形石器で打面を残すタイプ。（21、24～30）

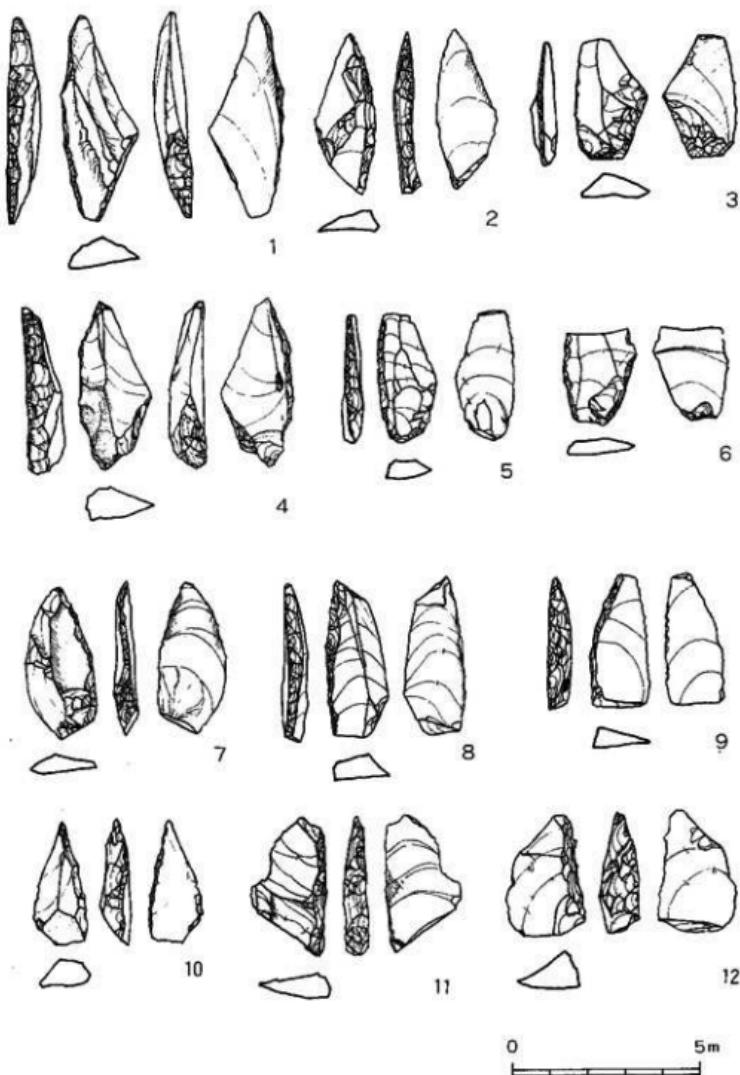
幅広剥片やすびまりの剥片を素材とし、両側縁にプランティング加工を施し刃部がやや傾くもののうち、打面を残し、打面とは反対側の側縁全部にプランティングを施している。頭部調整を有するタイプが多い。

素材的には21、24～27、30が素材を横位におくタイプ。28、29が素材を縦位におくタイプと2種類ある。なお、30はペン先状の薄手の剥片で、打面の反対側に微細な加工がみられる。

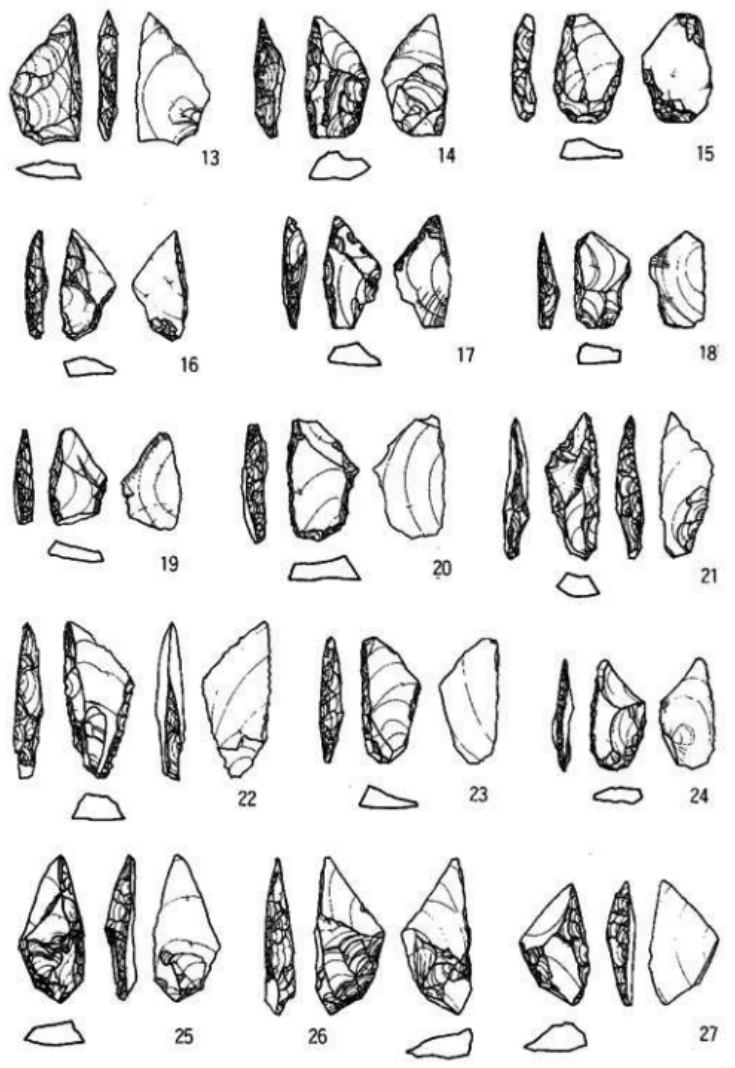
B-2類 「切出し形」のナイフ形石器で打面を残さないタイプ。（13～20、22、23、31～33）

素材・技法的には1類と同様であるが、打面を除去し、打面側は基部周辺に、反対側の側縁には全面にプランティング加工を施している。（13、16～20、22、31～33）は素材を横位におくタイプ。14、15、23は素材を縦位におくタイプである。16は打面の残存部分があり頭部調整もみられるが、打面除去の作業は行われている。16、22は基部に表着痕らしき痕跡がみられる。

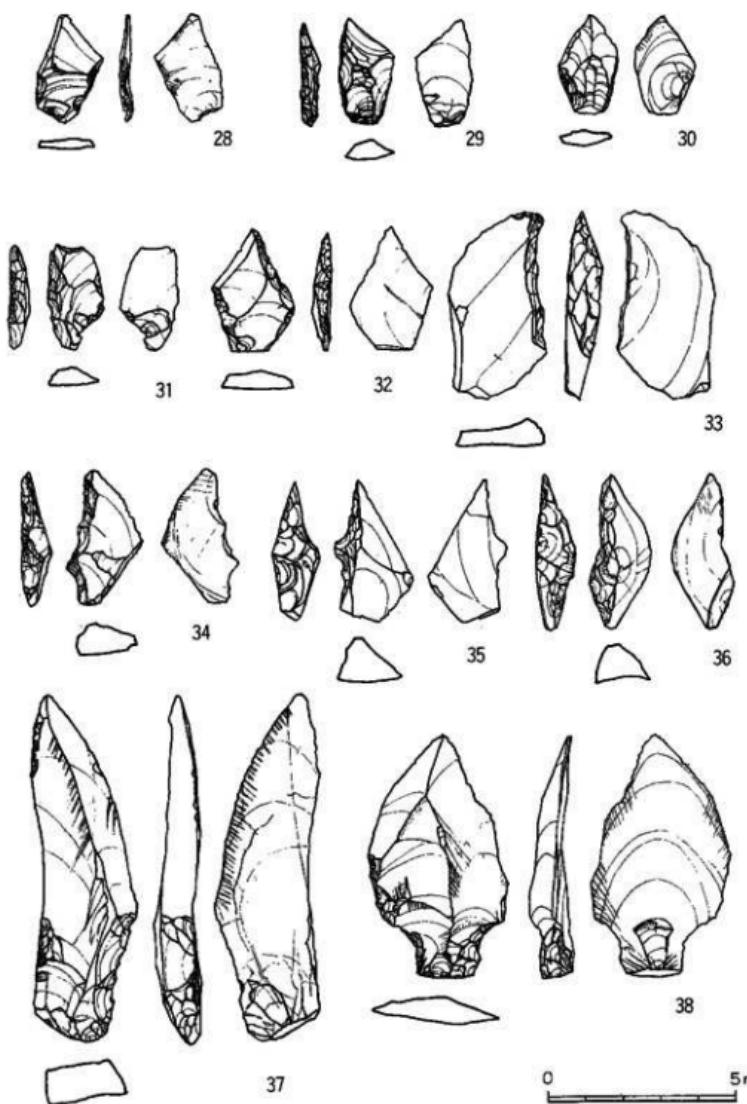
C類 横長剥片を素材とし、一側縁加工を施しているタイプである（35、36）。加工の入る側縁を直線的に整形し、半月状の形状を呈している。いわゆる「国府」型のナイフ形石器に類似すると思われる。一括資料の中に翼状剥片に類似する剥片も1点（54）だがみうけられる。



第12図 石器実測図(第1文化層…1)

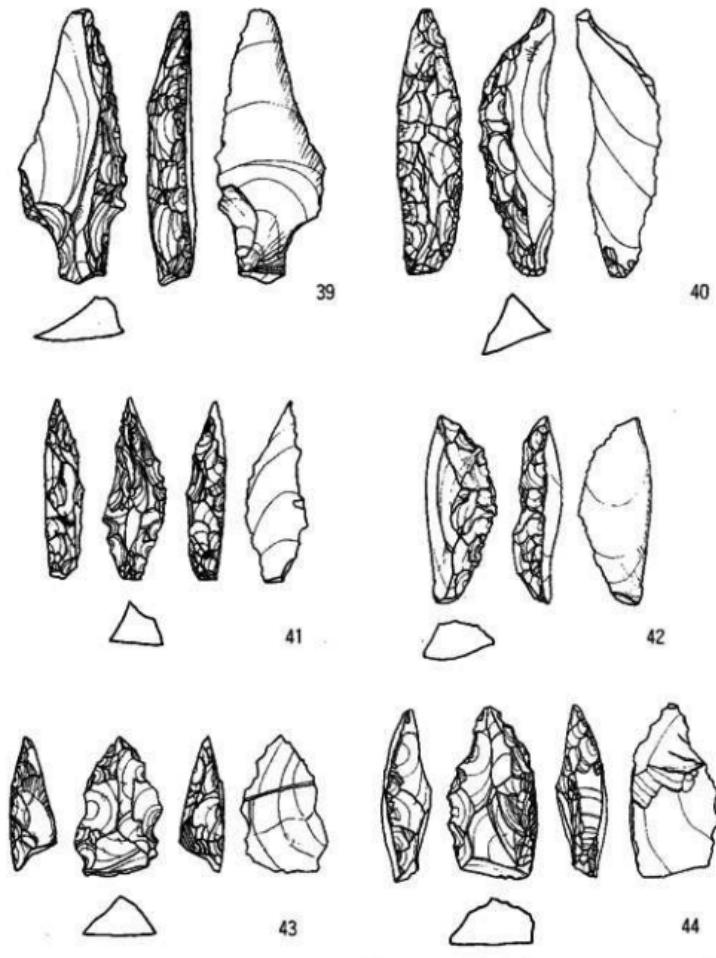


第13図 石器実測図(第I文化層…2)



第14図 石器実測図(第I文化層…3)

なお、10は一側縁のみの加工ではあるがbc類タイプのものである。8は欠損が著しいが加工側縁に対してほぼ平行にリングが入っておりb類タイプであろう。9と11も欠損が著しいがいづれも縱長剥片を用いており二側縁加工のタイプと思われる。12は剥片尖頭器の可能性も有する。



第15図 石器実測図(第1文化層…4)

0 5m

剥片尖頭器（第14図～第15図）

剥片尖頭器は3点検出された。いづれも有茎の剥片尖頭器と呼ばれるもので、このうち調査区3-c グリッドから検出された39は、断面三角形の厚手の縦長剥片を素材とし、片側縁の基部からその周辺部までと、もう片側縁の全体とにプランティング加工が施されている。(A類)。また、38は、5-c グリッドの擾乱土中か検出されたもので幅広で薄手の從長剥片を素材に、基部のみに快入状の加工が施されている。そのプランティング加工はかなり簡略的なものである。(B類)。これら、2タイプの剥片尖頭器は、いづれもナイフ形石器の範ちゅうに入るものの、ナイフ形石器の一群と考えられる。また、表採品ではあるが三日月形の細長い縦長剥片の片側の基部ともう片側の先端部のみにプランティング加工を施すタイプもある。(37)

三稜尖頭器（第15図）

出土した三稜尖頭器は全部で6点を数える。分布状況も、2-a、2-b、3-b、3-c グリッドと調査区のほぼ全域から検出される。これらは、素材は断面三角形と断面台形状の2種類の厚手の縦長剥片を用いているが、加工の方法によって3つに分類される。

A類 加工が表の二面に限られるが、二面のうちの片面を裏面より大きな剝離で1度加工する。素材は断面三角形で形状が三角錐の厚手の縦長剥片を用いる。(40、42)

B類 加工が表の二面に限られるもの。二次加工のうえで剝離面の形状が一定でなく粗雑である。しかも先端が鋭くないもの。B-1類(43)と、二面とも比較的丹念に加工しており鋭い先端を有するもの・B-2類(41)に分けられる。いづれも素材は断面三角形の形状が三角錐状の厚手の縦長剥片を用いている。

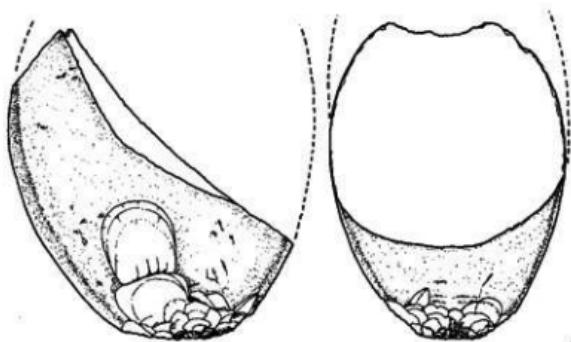
C類 加工が表の二面に施されているが中央部に平坦部(未加工部?)が残っている。素材は断面台形状で形状も角錐形になる縦長剥片を用いている。(44)

その他の石器（第16図～第18図）

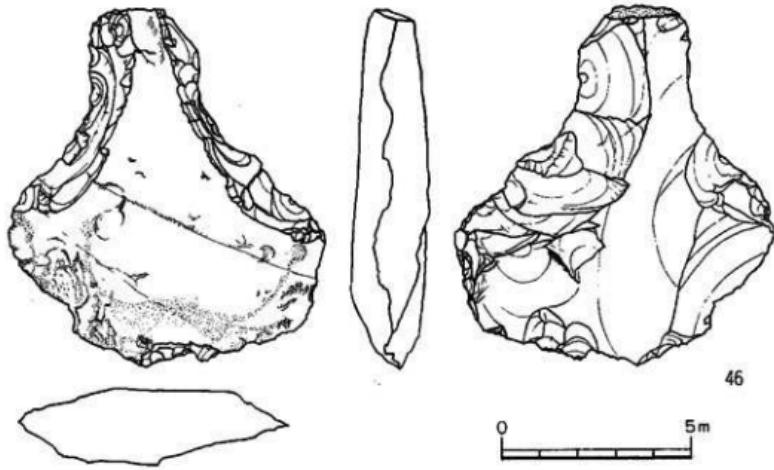
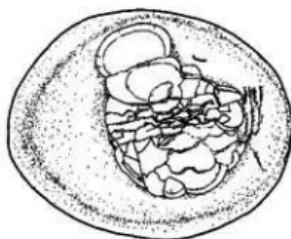
敲器は3点出土した。いづれも円碟を使用しており、楕円形(45)のものと、棒状のものがある。2種類とも円碟の一端に使用痕がみられる。45はスクレイバーと思われる。47は大型の石核、48は小型の石核、49～52は使用痕のある剥片である。

接合資料（第19図）

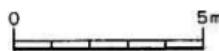
接合資料は63例を数え、資料の点数としては158点に及んだ。このうち、資料数2点のものが40例、3点のものが10例、4点のものが4例、5点のものが3例、7点のものが2例、13点と20点のものがそれぞれ1例づつを数える。資料数2～3点のものが8割近くを占める。石材別にみると、ディサイト質溶結凝灰岩16例、同(ガラス質)が19例、泥岩ホルンフェル



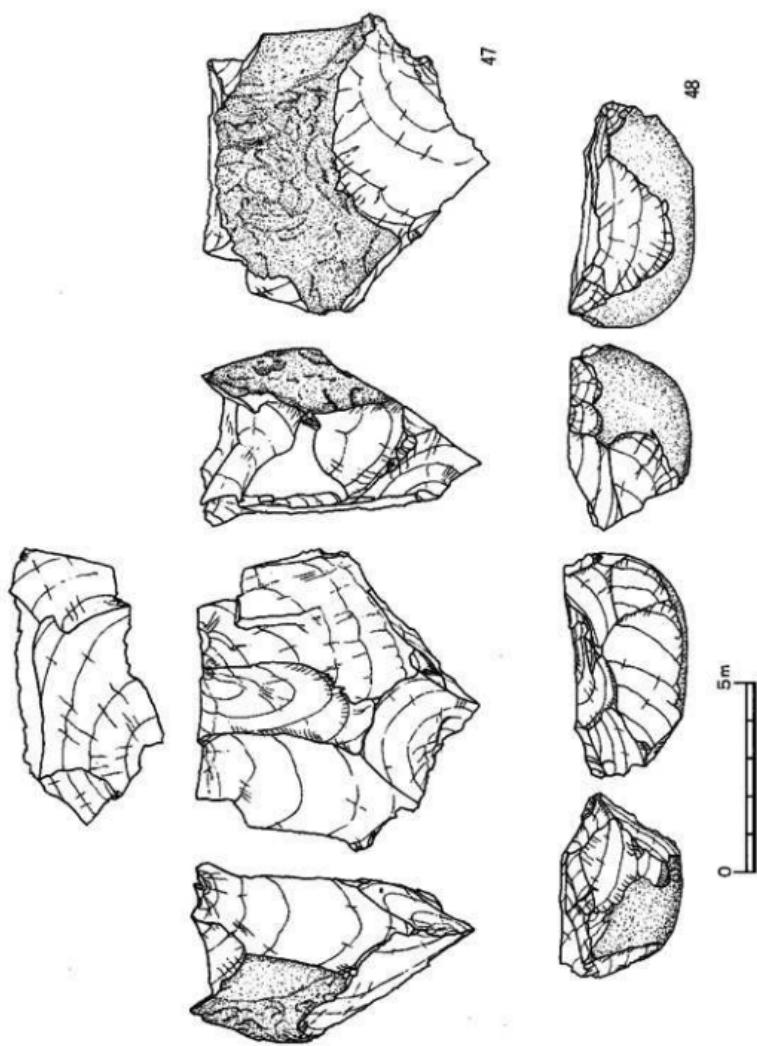
45



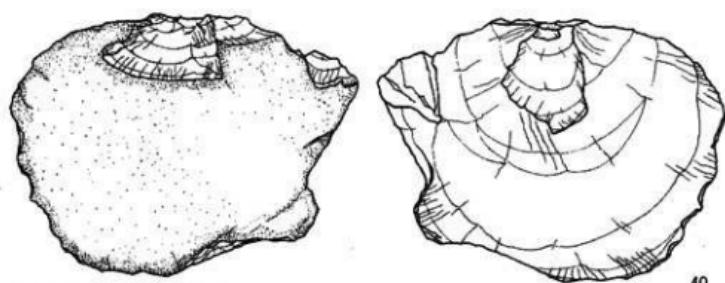
46



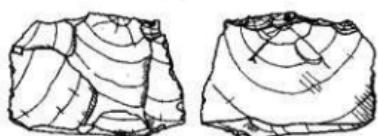
第16図 石器実測図(第1文化層…5)



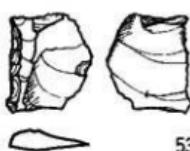
第17図 石器実測図(第1文化層…6)



49



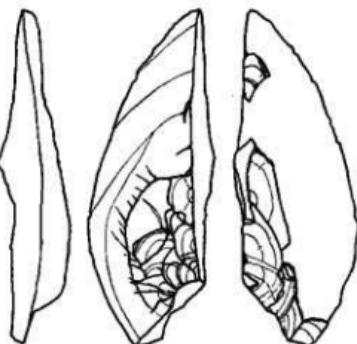
50



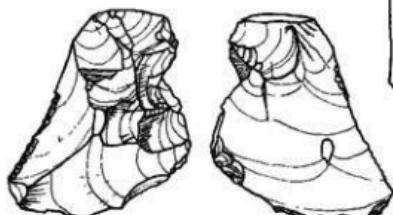
51



52



53



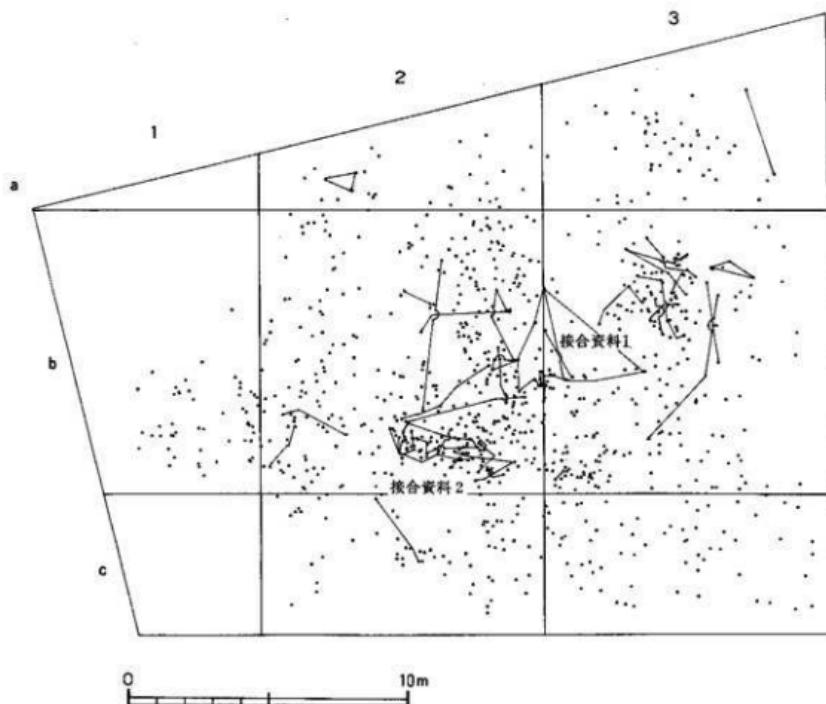
54



第18図 石器実測図(第I文化層…7)

ス17例、流紋岩質溶結凝灰岩8例、砂岩2例、チャート1例である。このうち、資料数10点以上の接合資料を概説すると、接合資料1は拳大より若干大きめのディサイト質溶結凝灰岩の円礫を母岩する資料数20点を超える接合資料である。接合関係は、2-b～3-bグリッドにかけて約3m四方を中心に、さらに北へ約3m、東へ約3mにまで及ぶ。

接合資料2の石材はディサイト質溶結凝灰岩で拳大程の円礫を母岩とする。資料数13点の接合資料である。接合関係は、接合資料1から南西へ2～3mのところ（2-bグリッド南側）で、長さ3m程度の東西方向に細長くのびている。



第19図 遺物分布図(接合資料……赤木第I文化層)

石器群の分布状況（第20図）

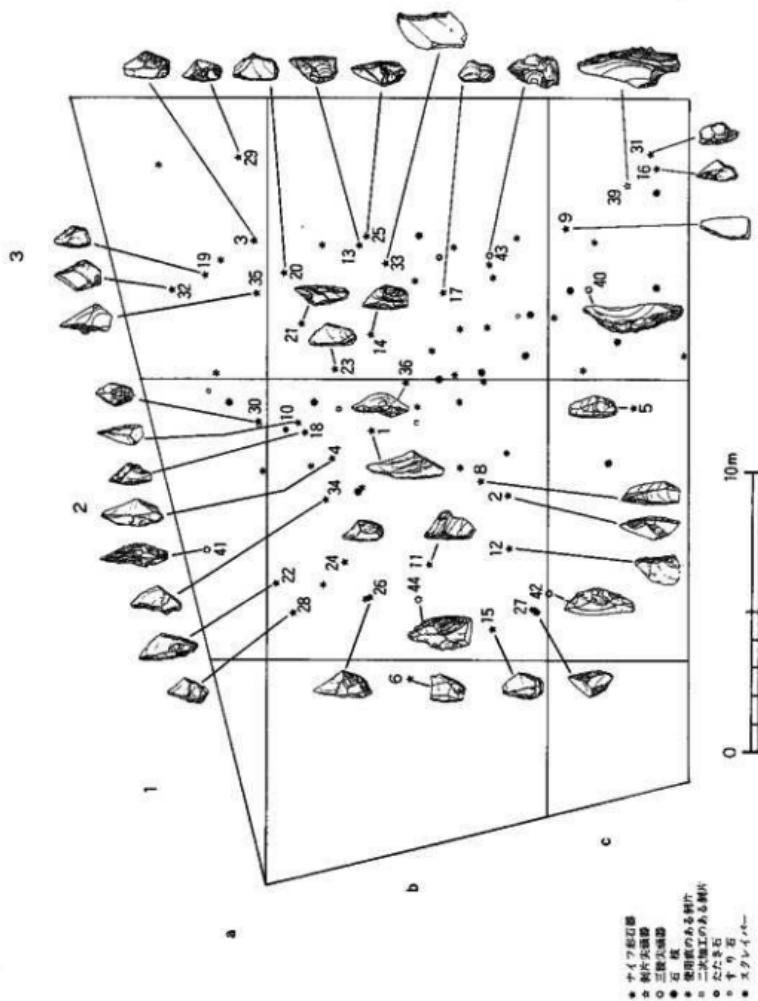
石器群の分布状況は石材別にみると、主体をなす4石材とも調査区全面にその分布をみるが、数量的に多いディサイト質溶結凝灰岩（ガラス質）を素材とする剝片、破片等がまんべんなく分布をみせ、泥岩ホルンフェルス、さらにディサイト質溶結凝灰岩へと石材によって次第にその分布範囲が狭まってくる。また、石材別に剝片・破片等の密集地や接合資料からみると、2-bグリッドの南東角、つまり、2-b、3-b、2-c、3-cの各グリッドが交じ合う地点付近で一つの群をなす。ディサイト質溶結凝灰岩の接合資料1、2をはじめ、同（ガラス質）、泥岩ホルンフェルス、流紋岩質溶結凝灰岩を素材とする剝片、破片や接合資料が5~6m四方の範囲に密集している（a群）。a群の南東側（3-cグリッド）に配石遺構を含む人頭大の礫の散布がみられる。a群の北側と西側にディサイト質溶結凝灰岩（ガラス質）の接合資料等が散布する。（いづれも2-bグリッド内）。また、a群の北東（3-bグリッド南西側）にディサイト質溶結凝灰岩と流紋岩質溶結凝灰岩の接合資料等が集中する。

次に、石器の器種別の分布状況をみると、まず、石器全体の分布状況は配石遺構やその周辺、および、接合資料等の多くみられるa群内での石器の分布はほとんどみられず、これらを取り巻む形で周辺地域に分布がみられる。

（4）まとめ

赤木第I文化層は、基本層序第Vb層下位を包含層としており、当遺跡における鍵層となる姶良Tn火山灰（第Ⅶ）層の上位層となる。石器組成はナイフ形石器、剝片尖頭器、三稜尖頭器、敲器、スクレイパー、二次加工のある剝片、使用痕のある剝片等によって構成されている。そのうち、ナイフ形石器が36点と出土石器総数の70%を超える数量が出土しておりこの文化層の代表石器と言える。このナイフ形石器も素材や加工技術のうえから、「柳葉形ナイフ」に代表される二側縁加工のナイフ形石器（A類）、切り出し形のナイフ形石器（B類）、国府系の横剥ぎの一側縁加工のナイフ形石器（C類）とバラエティーに富んでいる。このうち、赤木第I文化層のナイフ形石器の特徴としては、B類をさらに打面を残すタイプ（B-1類）と、打面を除去するタイプ（B-2類）に分類すると、そのうち、B-2類が圧倒的に多い点に代表される。また、C類の横剥ぎの一側縁加工のナイフ形石器は国府系の様相をもつナイフとして注目したい。三稜尖頭器においてはA類の片面を裏面より大きな剝離で一度加工する表二面加工の三稜尖頭器に代表される。

次に、ユニットの考察を試みると、約400m²の調査区の中では石器類、剝片・破片、焼礫の分布が全域にわたってみられる。このような状況の中で、調査区南東角で検出された1基の配石遺構を中心として、周辺部とその2~3m東、及び北東に焼礫の小ブロックがみられる。また、配石遺構の1mほど北西に接合関係のある剝片・破片等が集中する3~4mのブロックがみられる。このブロック内に石器類の分布はほとんどなく、配石遺構を拠点とした石器成作の機能をもつ一つのユニットとしての可能性をもつ。



第20図 遺物分布図(石器…赤木第1文化層)

2. 赤木第II文化層

赤木第II文化層は、細石器類を中心とする文化層で、第V a層の下位から第V b層の上位(ほぼ直上面)にかけて確認された。V b層の2層下位に鍵層となる姶良Tn火山灰層(V層)が堆積する。V a層は暗褐色とV b層より黒味が増し、V層(黒色土)の漸移層的な堆積を見せる。土質は、V b層同様、極めて粘性に富んだ土層である。層の厚さは上部が削平されているため明確ではないが、10cm前後と比較的薄い。削平が著しく、調査区中央~北側(2-b~3-bグリッド周辺)にかけては包含層がカットされており、第I文化層への遺物の混在もある。包含層として明確に確認できる部分は、2-c~3-cグリッドにかけての東西に長い100m²前後の範囲に限られている。遺物は約10cmのレベル幅で包含している。調査の結果、細石核5点、細石刃24点を検出した。なお、焼穢は2-c~3-cグリッドにかけて、第I文化層の礫群の分布地点より約10cm前後上位にその分布がみられた。

(1)礫の分布

2-c~3-cグリッドを中心に約100点の礫が検出された。第I文化層の礫群同様に、火を受けた状態のため赤変しており、もろくなっている。礫の大きさは拳大よりも小さく、ほとんどの礫が破碎礫によって構成されている。分布的に顕著な礫の集中箇所はみられないが、3-bと3-cの境付近で若干の礫の集中がみられる。なお、配石遺構等の遺構は確認できなかった。

(2)出土遺物と分布状況(第21図)

赤木第II文化層の石器群は約80点である。そのうち石器類は、細石刃24点、細石核6点(試掘時に2点出土)を数える。

石材は細石核、細石刃ともディサイト質溶結凝灰岩(ガラス質)とディサイト質溶結凝灰岩である。

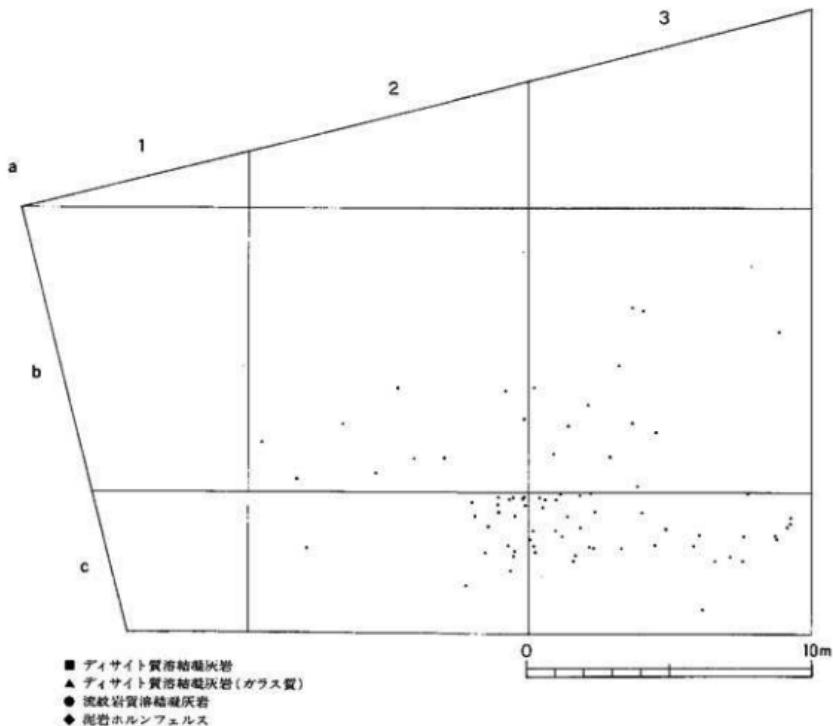
なお、ディサイト質溶結凝灰岩(ガラス質)やディサイト質溶結凝灰岩は、第I文化層でみられる同種のものと比べ石質等にさほど差異は認められない。

細石核(第23図・第24図)

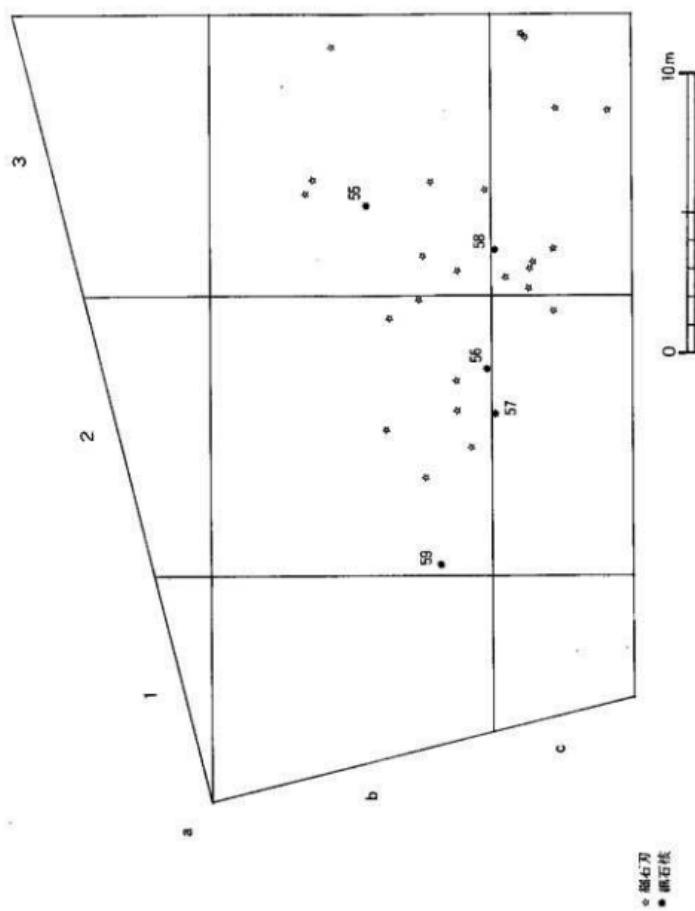
出土した細石核は、「礫あるいは剥片に平坦な打面を準備し、その平坦面から主として側面形成がおこなわれて細石核の形態がととのえられる」舟底形を呈する船底型の細石核と考えられる。

石材は、ディサイト質溶結凝灰岩(ガラス質)のものが3点(55、57、58)ディサイト質溶結凝灰岩のものが2点(56、59)である。

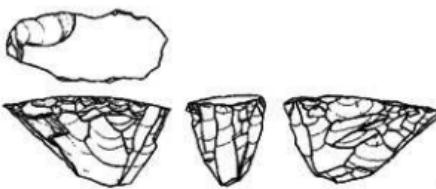
- A類 横に長い石核でその片側辺に沿って縦石刃の剥離が行われているもの。(55、59)
- B類 まず長方形あるいは台形状の舟底形を呈する平坦打面の細石核の一側辺（打面との角度約90度）に沿って長めの調整剥離を施した後、その石核を横転させ、最初の打面の剥離を行ないながら新たにできた横長の舟底形の石核を用いて一側辺に沿って剥離が行われている。結果的には、後からの打面は最初の石核の底部にあたり、最初の剥離方向から180度反転させる技法をとっている。(56)
- C類 円錐形の石核で側辺に沿って縦石刃の剥離が行われている。(57)
- D類 砲弾形の石核で側辺全面にわたって縦石刃の剥離が行われている。(58)



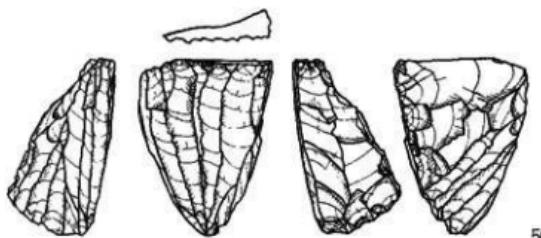
第21図 遺物分布図 (石材別…赤木第II文化層)



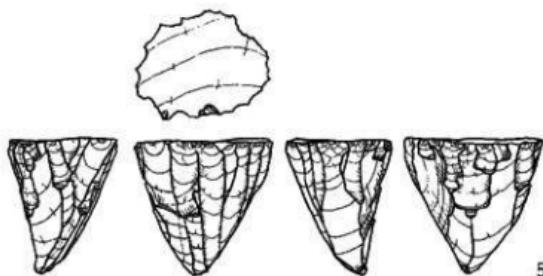
第22図 遺物分布図(細石器…赤木第II文化層)



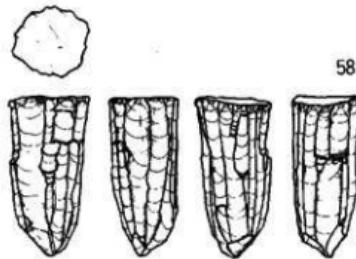
55



56



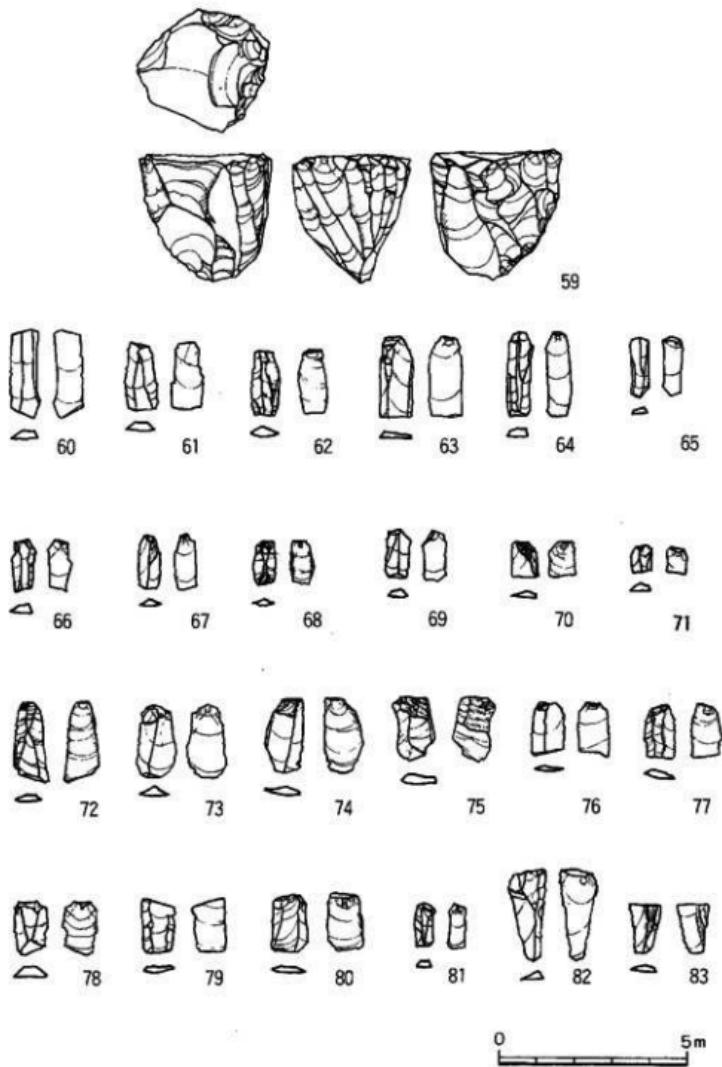
57



58



第23図 石器実測図(第II文化層-1)



第24図 石器実測図(第II文化層-2)

細石刃（第24図）

細石刃も2-b～3-cを中心に検出された。点数は24点を数える。内訳は、3-cから9点、3-bから8点、2-bから6点、1-bから1点である。出土した細石刃はすべて側縁への細部調整は施されていない。完形品は近いものも含めて10点あり、他は、頭部（4点）、中間部（4点）、先端部（3点）を数える。また、形状では、幅1cm程度の幅広タイプ（6点）、幅5mm前後の細身タイプ（14点）、打面から先端に向って尖るタイプ（2点）がある。また、頭部に頭部調整痕のみられるものもある。

石材は、細石核同様、ディサイト質溶結凝灰岩（ガラス質）のもの17点、ディサイト質溶結凝灰岩のもの7点を数える。

石器群の分布状況（第22図）

削平により、包含層は2-c～3-cグリッドを中心にわずかにしか検出できず、石器群の分布もその範囲内にまんべんなく分布している。そのため、礫群の分布はもちろん、石器群の分布についてもその把握は困難である。しかし、狭い範囲の上、少ない資料から分布状況について述べると、試掘（2-cグリッド付近）時検出の細石核2点（56、57）の東側に細石刃の集中地点がみうけられる程度である。なお、石器類の分布も、礫の分布同様、第Ⅰ文化層の包含層とレベル差で20～30cmの水垂分布の差がみられる。

（3）まとめ

赤木第Ⅱ文化層は、第Ⅴa層下位～第Ⅴb層上位（ほぼ直上）を包含層とする文化層で、当遺跡基本層序の鍵層にあたる姶良Tn火山灰（第Ⅶ）層の上位層にあたり、さらには赤木第Ⅰ文化層を包含する第Ⅴb層の直上部にあたる。出土した石器の組成は、細石核、細石刃等の細石器類である。この包含層は調査区全体が削平状態にある中で、調査区北側の3分の2程の範囲の包含層がカットされ、細石器類とナイフ形石器等の下位文化層の遺物との混在も認められた。しかし、調査区南側の3分の1程の範囲では、削平が包含層まで及んでおらず、明らかに第Ⅰ文化層との間での包含層のレベル的差違が確認でき、出土遺物のうえからも第Ⅰ文化層からは細石器類の出土はみられず、第Ⅱ文化層を細石器のみを包含する文化層として確立できる資料が得られた。

さて、第Ⅱ文化層の特徴としては、細石核にきわめて特徴的な資料がみられる。細石核はいづれも「船野型」の細石核の範疇に入るもので、舟底形の細石核と円錐形の細石核がある。舟底形のタイプではB類の剥離方向を180度反転させて剥離面をとる細石核は類例がなく「船野型」の細石核の型式の中で特殊な技法と言える。また、円錐形のタイプでは、d類の砲弾形細石核が、c類の典型的な円錐形細石核の剥離作業が進行した形のものであり、「船野型」の円錐形細石核の最終段階の細石核と思われる。

表2 石器計測表(1)

図面No.	器種	器長cm	器幅cm	器厚cm	石質	遺物No.
1	ナイフ形石器	5.45	1.95	0.77	A ₁	2b-7
2	"	4.22	1.60	0.51	B	2b-402
3	"	3.26	1.88	0.60	B	3a-23
4	"	4.40	1.88	1.01	C	2b-6
5	"	3.42	1.55	0.49	A ₁	2c-64
6	"	2.51	1.91	0.36	B	1b-19
7	"	4.04	1.82	0.56	A ₁	5C
8	"	4.07	1.57	0.68	A ₁	2b-401
9	"	3.50	1.51	0.57	D	3c-222
10	"	3.21	1.42	0.69	A ₁	2b-5
11	"	3.62	1.99	0.70	B	2b-405
12	"	3.27	2.10	1.02	A ₂	2b-423
13	"	3.45	1.89	0.42	C	3b-354
14	"	3.22	1.65	0.82	A ₂	3b-2
15	"	2.95	1.52	0.53	A ₁	2b-430
16	"	2.88	1.44	0.53	A ₁	3c-224
17	"	2.55	1.47	0.53	A ₁	3b-80
18	"	2.96	1.49	0.58	A ₂	2b-23
19	"	2.50	1.49	0.43	A ₁	3a-40
20	"	3.18	1.86	0.64	B	3b-7
21	"	3.82	1.45	0.60	A ₂	3b-1
22	"	4.23	1.52	1.25	A ₂	2b-604
23	"	3.35	1.54	0.58	A ₁	3b-413
24	"	2.92	1.44	0.43	B	2b-2
25	"	3.85	1.78	0.70	A ₂	2b-497
26	"	4.14	1.86	0.87	C	2b-1
27	"	3.28	1.78	0.66	A ₂	2b-603
28	"	2.72	1.47	0.29	A ₂	2b-82
29	"	3.80	1.45	0.52	A ₁	3a-87
30	"	2.13	1.57	0.43	B	2a-47
31	"	2.75	1.45	0.47	A ₁	3c-226
32	"	3.20	1.99	0.47	B	3a-28
33	"	5.12	2.45	0.77	A ₂	3b-57
34	"	3.54	1.85	0.81	B	2b-181
35	"	3.50	1.98	1.17	B	3a-64
36	"	4.06	1.52	1.00	C	2b-643
37	剥片尖頭器	9.25	2.50	1.00	D	5b
38	"	6.44	3.55	0.97	A ₁	5c
39	"	7.31	2.82	1.20	B	3c-86

40	三棱尖頭器	7.11	1.87	1.49	B	3c-212
41	"	4.82	1.57	1.03	A ₁	2a-1
42	"	4.91	1.90	1.04	C	2c-140
43	"	3.66	2.16	1.21	B	3b-295
44	"	4.52	2.34	1.29	A ₂	2b-3
45	敲 器	8.56	7.79	6.20	C	3b-212
46	搔 器	9.51	8.25	2.49	A ₁	2b-288

(石質) A₁……ディサイト質溶結凝灰岩 A₂……ディサイト質溶結凝灰岩(ガラス質)
 B……流紋岩質溶結凝灰岩 C……泥岩ホルンフェルス D……砂岩

表3 石器計測表(2)

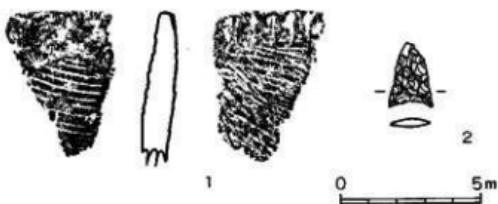
図面No.	器種	器長cm	器幅cm	器厚cm	石質	遺物No
55	細石核	2.32	4.22	1.92	A ₂	3b-208
56	"	4.78	3.42	2.76	A ₁	T ₁ -B-14
57	"	3.57	3.67	2.86	A ₂	T ₁ -B-2
58	"	4.18	1.92	1.84	A ₂	3c-264
59	"	3.32	3.65	3.52	A ₁	2b-605
60	細石刃	2.34	0.78	0.18	A ₂	3c-311
61	"	1.76	0.79	0.22	A ₁	3c-2
62	"	1.75	0.73	0.22	A ₂	3c-189
63	"	2.13	0.86	0.20	A ₂	2b-113
64	"	2.19	0.69	0.20	A ₂	3c-210
65	"	1.52	0.51	0.14	A ₁	3b-221
66	"	1.32	0.54	0.17	A ₂	2b-441
67	"	1.43	0.57	0.15	A ₁	2b-238
68	"	1.16	0.60	0.13	A ₂	3b-288
69	"	1.21	0.64	0.15	A ₂	3c-199
70	"	0.96	0.66	0.18	A ₂	3c-240
71	"	0.69	0.67	0.14	A ₂	2b-127
72	"	2.09	0.93	0.21	A ₂	3c-306
73	"	1.88	1.04	0.23	A ₂	3b-5
74	"	1.98	1.00	0.17	A ₂	3b-469
75	"	1.65	0.99	0.24	A ₂	3b-262
76	"	1.34	0.83	0.20	A ₂	3b-49
77	"	1.38	0.82	0.20	A ₁	1b-70
78	"	1.36	0.87	0.27	A ₂	3c-76
79	"	1.41	0.88	0.14	A ₂	3c-1
80	"	1.49	0.94	0.18	A ₂	3b-358
81	"	1.12	0.55	0.14	A ₁	2b-620
82	"	2.38	1.04	0.25	A ₁	2b-655
83	"	1.28	0.82	0.15	A ₁	3b-522

(石質) A₁……ディサイト質溶結凝灰岩 A₂……ディサイト質溶結凝灰岩(ガラス質)

第2節 繩文時代の遺物（第26図）

調査区内で繩文土器の破片1点や石鉄2点の採集があり、繩文時代の包含層の存在が考えられる。しかし、調査区内は、旧石器時代文化層近くまで削平されており、包含層等の確認はできなかった。

1は、口唇部表に刻目、胴部表裏に貝殻条痕の施文がみられる吉田、前平系の繩文時代早期の土器片である。2は、黒曜石の石鉄である。

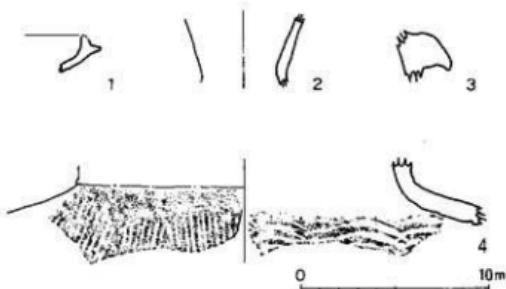


第25号 繩文時代出土遺物

第3節 古墳時代の遺物（第25図）

調査区北側に南方古墳22号墳が隣接するが、調査区は22号墳裾面より1.5m以上も削平されており包含層の確認はできなかった。しかし、須恵器片14点が表採された。

1は、環身口縁部で口縁部を欠くがたちあがりは短かい。2は、提瓶の頸部と思われる。自然軸がかかる。3は、提瓶の把手、4は、大甕の頸部～肩部にかけての破片で裏面肩部以下に同心円文タタキがみられる。自然軸がかかる。



第26図 古墳時代出土遺物

第4章 結語

今回の赤木遺跡の発掘調査では、旧石器時代に属する二つの文化層が検出された。二つの文化層は、いづれも、当遺跡基本層序において鍵層となる姶良Tn火山灰（A・T）層の上位層にあたる。このうち、下位にあたる赤木第I文化層（赤木I）はナイフ形石器を中心とした剥片尖頭器、三棱尖頭器、敲器、スクレイバー等から構成される石器群でナイフ形石器文化層である。また、上位にあたる赤木第II文化層（赤木II）は細石核・細石刃からなる細石器文化層である。

赤木Iの出土石器の中で出土数8割を超えるナイフ形石器は、縦長剥片を素材とした二側縁加工のナイフ（A類）、幅広、あるいはすばり剥片を素材とした切出し形ナイフ（B類）、横剥ぎの剥片を素材とした一側縁加工のナイフ（C類）の3種類を主体としており、さらにB類は、打点を残すタイプ（B-1類）と、打点を除去するタイプ（B-2類）に細分化できる。タイプ別には、A類6点、B-1類8点、B-2類13点、C類2点と、B類、特にB-2類が多い点に注目したい。また、剥片尖頭器は2点と少ないがいづれも有茎で基部加工のものと、基部および一側縁を加工するタイプがみられる。一方、三棱尖頭器は、断面三角形で表二面調整のタイプ（A類）と、表二面調整だが片面は裏から1回のみ剥離を施すタイプ（B類）、中央部に未加工部分が残り断面台形を呈する表二面調整のタイプ（C類）の3種類がある。全出土数7点と少ないが、B類がそのうち4点と半数を占める。以上、赤木Iの石器組成の特徴を概略すると、切出し状のB-2類に代表される多量のナイフ形石器と、三棱尖頭器（B類に代表）が主体となり、有茎の剥片尖頭器も石器組成の一角をなすが、台形石器を含まないナイフ形石器文化と言えよう。

さて、次に、県内におけるA・T層上位のナイフ形石器を出土する遺跡である佐土原町船野遺跡と堂地西遺跡と比較してみると、船野遺跡では、細石核、細石刃、ナイフ形石器、台形様石器、三棱尖頭器、搔器、削器、石錐、彫器、礫器等を石器組成とする石器群が同一層から出土しており、特にナイフ形石器、三棱尖頭器、台形様石器の三器種を見ると、ナイフ形石器は、縦長剥片の二側縁加工ナイフ、切出し形ナイフ、横長剥片の一側縁加工ナイフ等から成り、赤木Iでみられるナイフ形石器群に類似する。三棱尖頭器にも赤木IでみられるA類、B類のタイプが含まれている。一方、船野でみられる半円状や三角形状、あるいは、長方形状の台形様石器は赤木Iではみられない。しかし、赤木Iでみられた有茎の剥片尖頭器は船野ではみられない。

堂地西遺跡では、ナイフ形石器と剥片尖頭器を中心とした石器組成を示す。堂地西の剥片尖頭器は有茎で赤木IのA類タイプと、片側に抉入状の加工が入るタイプがみられる。ナイフ形石器は切出し状のタイプである。しかし、石器組成の中に三棱尖頭器、台形（様）石器等は含まれない。

以上、A・T層より上位ナイフ形石器文化に位置する県内三遺跡の様相を見ると、堂地西では切出し状のナイフ形石器と有茎の剥片尖頭器が主体となり、三棱尖頭器、台形(様)石器はまだ含まれない様相をみせる。また、赤木Iでは、切出し状のナイフ形石器と有茎の剥片尖頭器のセットに三棱尖頭器が加わるが、台形(様)石器は含まない様相を示す。さらに船野では細石器は別として有茎の剥片尖頭器が姿を消しナイフ形石器と三棱尖頭器のセットに台形様石器が新しく加わる石器組成の様相を見せる。

赤木IIでみられた細石核は「船野型細石核」と称しているもので、形状は舟底状のものと円錐状のものがある。船野型細石核を出土する遺跡として、その標式遺跡である船野遺跡と北方町岩土原遺跡がある。船野遺跡では舟底状の細石核と細石刃がナイフ形石器、三棱尖頭器、台形様石器等と同一層(第IV層)から出土している。一方、赤木遺跡から西へ5kmの五ヶ瀬右岸流域の河岸段丘上の岩土原遺跡では、第II文化層から船野型細石核(舟底状)が検出されており、隆帶文形土器を共伴している。このように、船野遺跡においては細石器とナイフ形石器等の共存、岩土原遺跡においては細石器と土器共伴という細石器文化研究のうえで重要な問題を両遺跡とも含んでいる。しかし、いづれも包含層の状態についての懸念がみられる。特に、船野遺跡においては、包含層の細分化等の問題が残るところである。今回調査の赤木遺跡では、ナイフ形石器を主体とする一群と細石器の一群が層位的に分れる結果となった。削平の関係から一部に遺物の混在する可能性も考えられるが、削平からまぬがれたc-3グリッド付近では確実に両者が水垂分布で分かれる結果を得られた。

以上、今回の調査では、これまで空白となっていた宮崎県北部の五ヶ瀬川流域における旧石器文化のうち、A・T層より上層のナイフ形石器文化と細石器文化との良好な資料を得ることができた。しかし、調査区の制約から赤木遺跡全体の旧石器文化については明確にできなかったが、赤木遺跡の所在する台地はもとより、延岡市から北方町にかけての五ヶ瀬川流域の河岸段丘上には良好な旧石器時代の存在が十分に考えられる。今後、何らかの機会にさらに詳細な資料が得られるであろう。また、今回はA・T層上位での文化層の確認に終ったが、周辺の地層の露頭にはA・T層直下に良好な黒色帯もみられA・T層下位での文化層の確認も期待される。

最後になりましたが、旧石器の石材については北九州市立自然史博物館の藤井厚志氏に御教示を賜った。石器の分類等については明治大学大学院生の荻幸二君の助言を大いに参考にさせていただいた。また、昨年宮崎市で開かれた九州旧石器研究会においても諸先輩の皆様から貴重な御意見をいただいた。記して感謝申し上げます。

1. 遺跡遠景
(北から)



2. 遺跡遠景
(南から)



3. 遺跡近景
(南側)



図版(2)

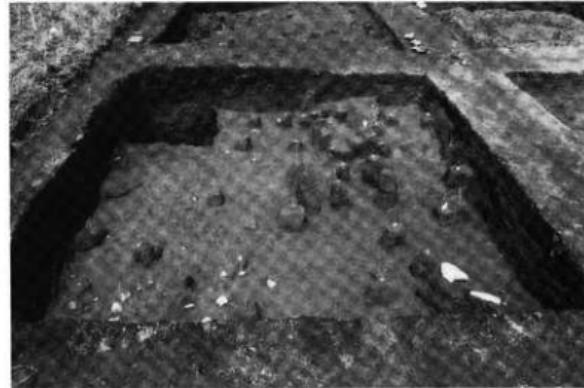
1. 遺跡近景
(北側22号墳)



2. 発堀調査区全景
(北東側から)



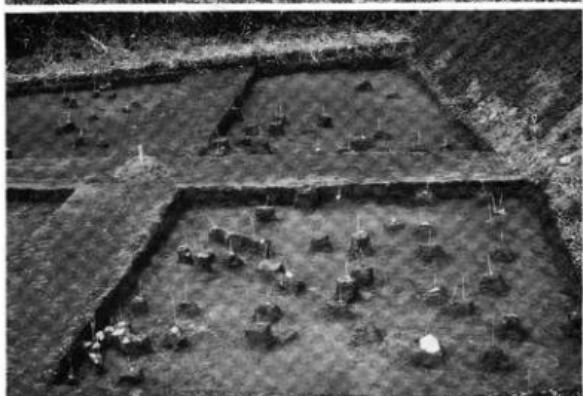
3. 遺物出土状況
(3-Cグリッド)



1. 遺物出土状況
(2-a～2-bグリッド)



2. 遺物出土状況
(3-a～3-bグリッド)



3. 配石造構
検出状況



図版(4)

1. 発堀調査風景



2. 発堀調査風景



3. 作業員、協力者
のみなさん



1. 遺物出土状況
(2b-605)



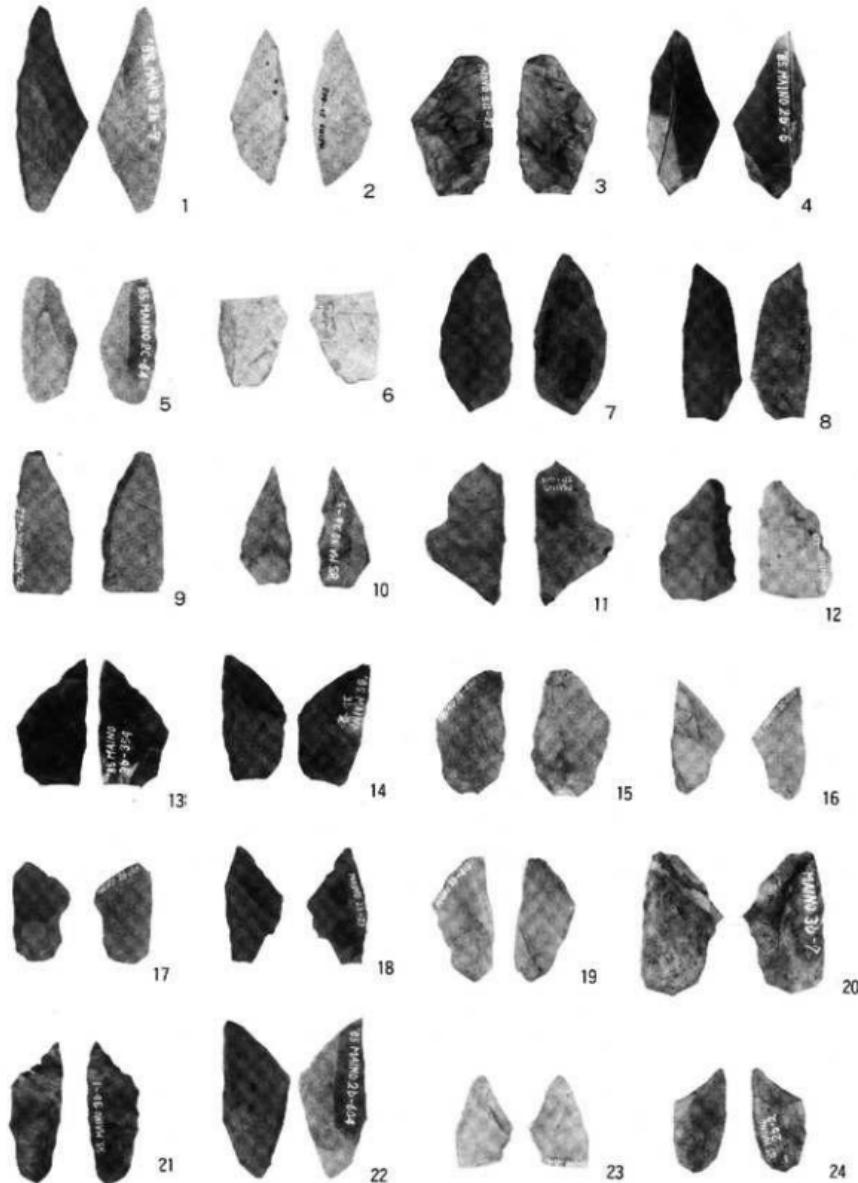
2. 遺物出土状況
(2b-7)



3. 遺物出土状況
(2b-3)

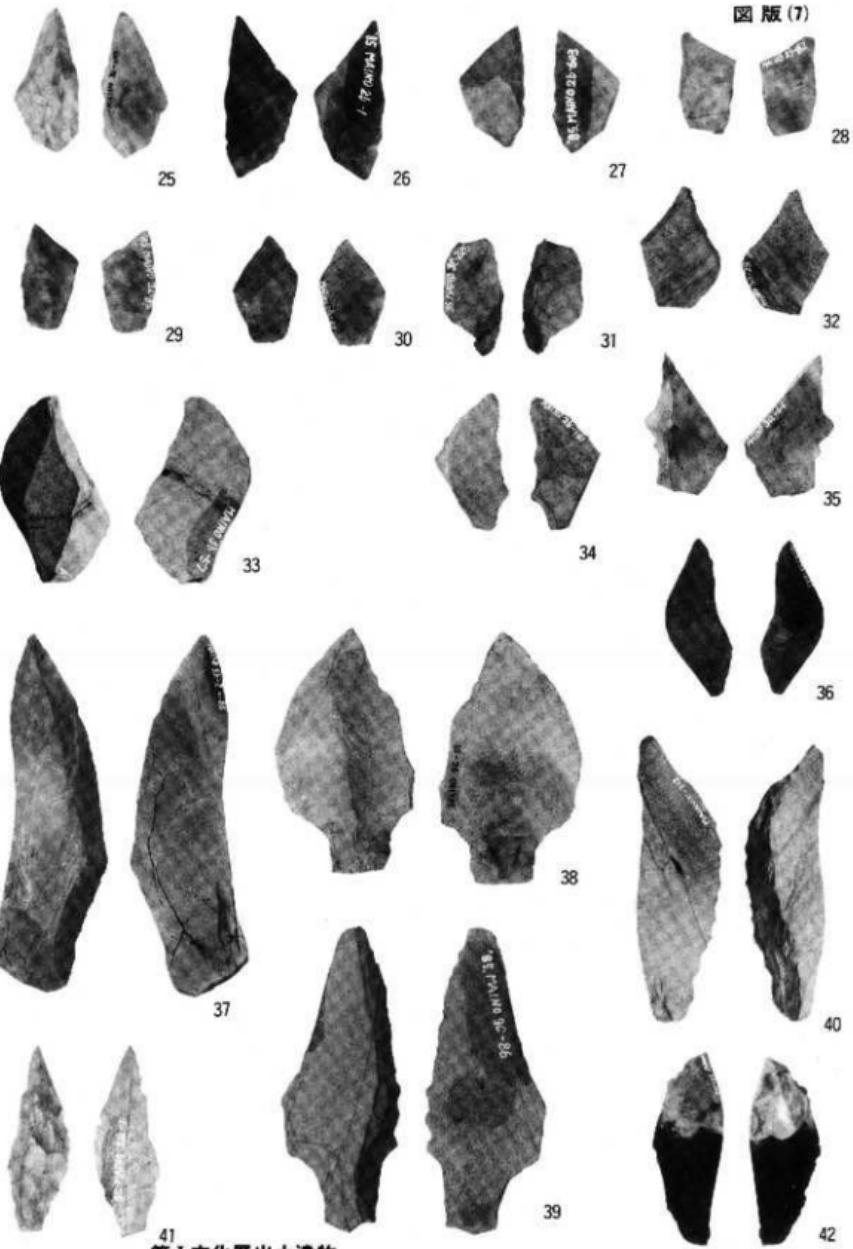


図版(6)



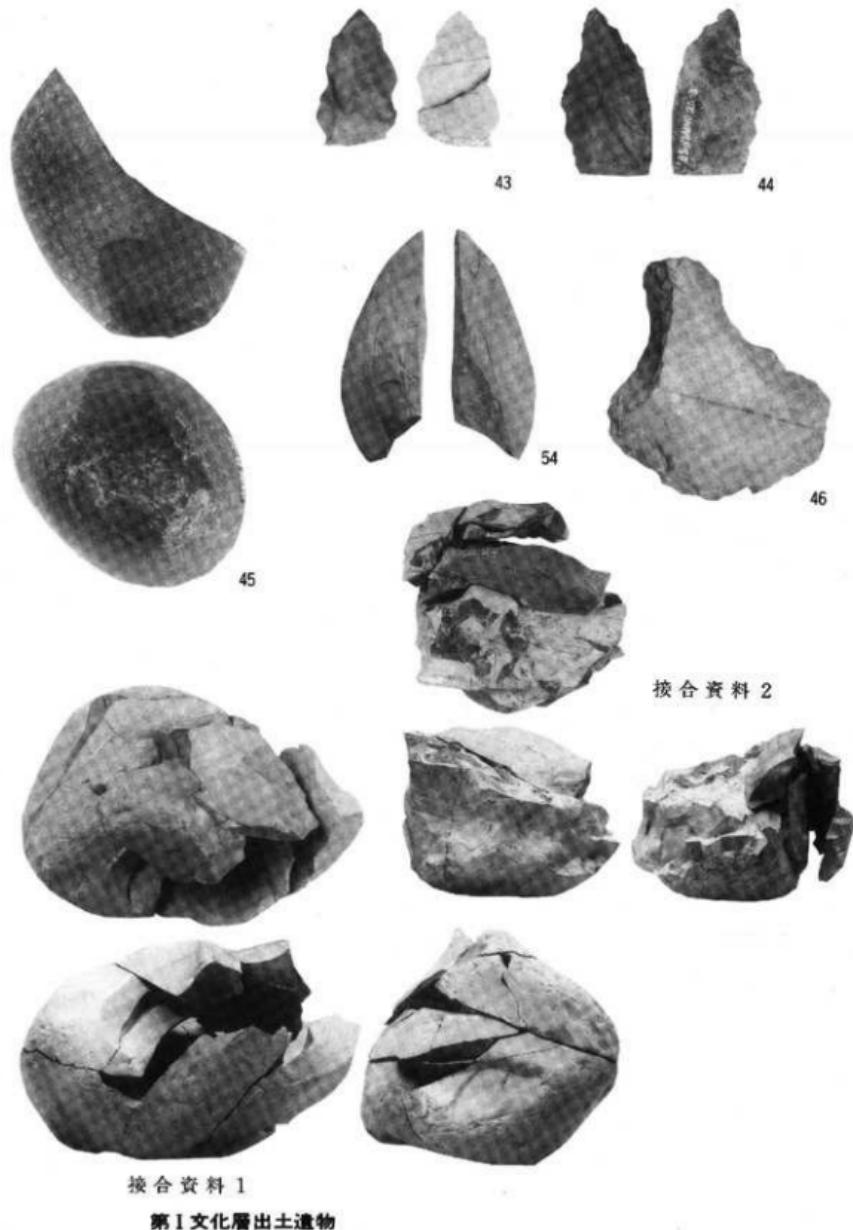
第Ⅰ文化層出土遺物

図版(7)



第1文化層出土遺物

圖版 (8)



接合資料 1

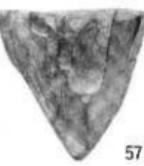
第 I 文化層出土遺物



55



56



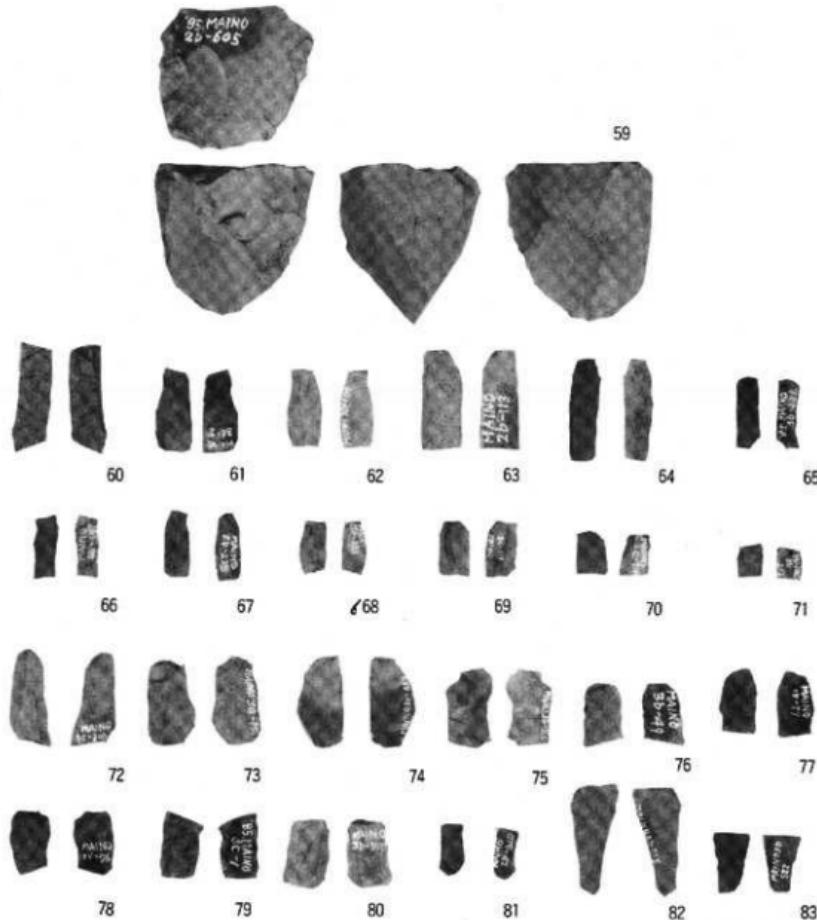
57



58

第II文化層出土遺物

圖版10



繩文時代遺物



古墳時代遺物



第II文化層・縄文時代・古墳時代遺物

多々羅遺跡

(多々羅箱式石棺発掘調査)

例　　言

1. 本報告は昭和61年6月延岡市教育委員会が実施した多々羅箱式石棺発掘調査報告である。
2. 本報告書の執筆・編集は県文化課主事、近藤協があたった。
3. 遺構実測図方位は磁北を示している。

本文目次

1. 遺跡の位置と環境	56
2. 発見の経緯と調査経過	57
3. 調査の方法	58
4. 層序	58
5. 調査の結果	59
6. まとめ	61

挿図目次

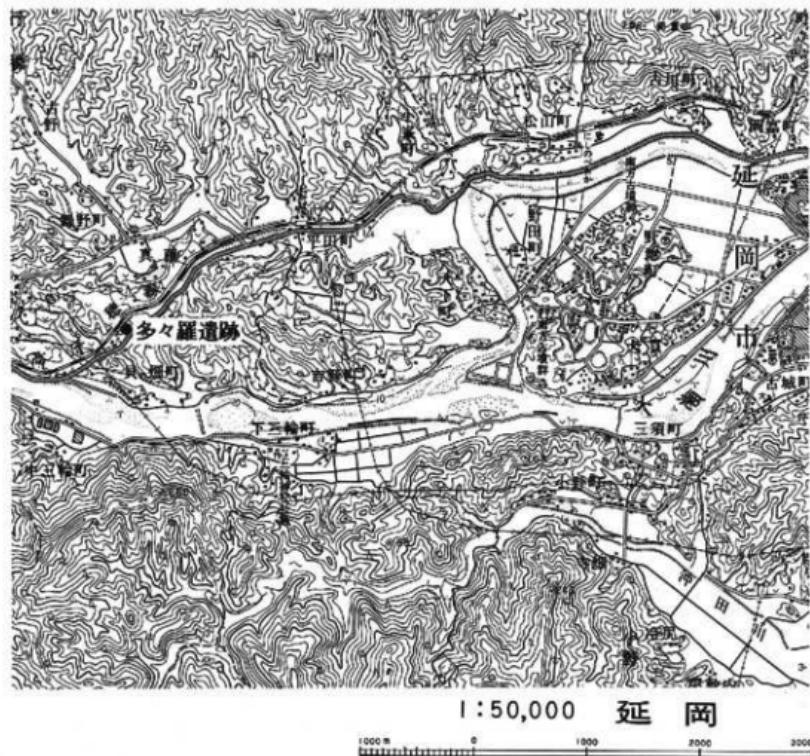
第1図 遺跡所在地	56
第2図 発掘区及び周辺図	57
第3図 出土土器実測図	59
第4図 石棺実測図（蓋・土壤）	66
第5図 石棺実測図（身）	60

図版目次

図版1 1. 発掘状況 2. 石棺全景	62
図版2 1. 蓋石の状況 2. 石棺全景 3. 石棺とりあげ状況	63
4. 蓋石(頭部) 5. 石棺全景(頭部より) 6. 石棺全景	63
図版3 1. 石棺とりあげ状況 2. 蓋石をとり上げた直後の状況	64
3. 棺内精査後の状況	64

所在地

延岡市舞野町1487-200



第1図 遺跡所在地

1. 遺跡の位置と環境

調査地は五ヶ瀬川北岸、国鉄高千穂線と国道218号線に狭まれた標高51cmの狭隘な台地上に位置し、国指定史跡南方古墳群の一支群を形成する平田・舞野町支群域内にある。

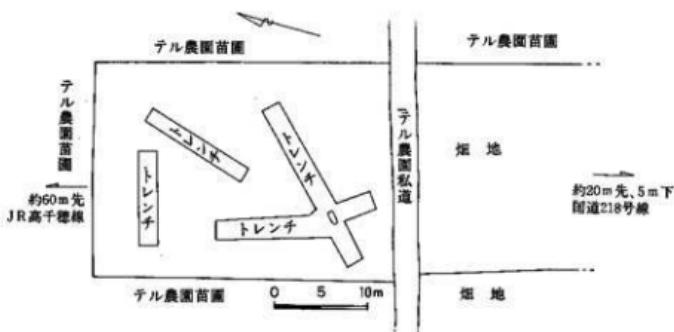
南方古墳群平田・舞野町支群は前方後円墳1基(20号)、円墳5基(18・19・21・22・23号)からなるが、そのうちの最西端にある18号墳から南西約100mのところに今回調査した箱式石棺がある。

南方地区は国指定史跡南方古墳群をはじめとして、先土器、縄文、弥生各時代にわたる遺跡が点在する。先土器時代の遺跡は本報告書に報告している赤木遺跡の他、今井野、下舞野で表探資料があり、一帯は有望な旧石器時代遺跡が点在すると考えられる。縄文時代に入るト、五ヶ瀬川と大瀬川間にさまれた低丘陵端に貝塚が営まれる。これは大貫貝塚として知られ、押型文土器、塞ノ神式土器の出土をみて縄文早・前期の貝塚として貴重であり、しかも現在でもよく保存されている。大貫遺跡、野田八田遺跡、荒田遺跡、貝ノ畠遺跡は当地区の主要な弥生時代遺跡である。貝の畠遺跡では弥生終末期の住居址が検出されている。尚、当遺跡周辺の国道218号線道路脇には至るところ阿蘇凝灰岩の露頭がみられ、採石場が点在する。

2. 発見の経緯と調査経過

当遺跡の土地所有者である佐藤輝一氏の届け出によると、昭和61年5月以来機械による耕運中、再三にわたって何かに触れることがあり、耕作に支障をきたしたので、その箇所の一部を堀ってみたところ偏平な板石を掘りあげた。畠地付近は南方古墳群の一角にあたり、しかも100m北には石棺を露出する18号墳もあることから、これがそれ等と関連あるものと考えて現状に埋め戻し、延岡市社会教育センター館長甲斐常美氏に連絡をとった。

以上が発見の経緯である。延岡市教育委員会は、その保存について佐藤氏と協議したが農作業上現状では保存することは困難であると考えられ、耕作再開前に同教委が記録保存を目



第2図 発掘区及び周辺図 (1/600)

的とした緊急発掘調査を昭和61年6月4日より同年6月6日の3日間の予定をもって実施するに至った。調査は延岡市教育委員会が主体となり、宮崎県文化課主事近藤が直接担当した。また調査に際しては、延岡市教育委員会社会教育課主事渡辺博史氏、延岡市社会教育センター館長甲斐常美氏の両氏に御協力いただいた。

3. 調査の方法

石棺出土地点を中心として、佐藤氏所有の畠地に第2図のようにトレンチを設定し、周溝等石棺に伴うと考えられる遺構の検出を意図した。石棺周辺を除く全てのトレンチは赤ホヤ面まで剥いでいる。

4. 層序

遺跡が位置する台地一帯は第二オレンジ層（姶良Tn火山灰層）の堆積がやや薄く判別し難いものの、第一オレンジ層（赤ホヤ）は良く残存している。ただ、赤ホヤ直下の黒褐色土層は小白斑石を含まず、通常の黒ニガ土とは若干異なっている。以下、層序である。

I層（黒褐色土）……………耕作土である。サラサラしてほとんど粘性をもたない。小粒の赤ホヤブロックを含む。

II層（第一オレンジ）…………赤ホヤ層。明橙色を呈し、赤茶色の糸状斑をみる。上層は耕作により若干削平されている。

III層（黒褐色土）……………I層より黒味をおびている。粒子が緻密で粘性が極めて大である。

VI層（茶褐色土）……………粒子が緻密で粘性が極めて強い。石棺の床土となっている。

V層（褐色土）……………VI層よりさらに明るい粘性の強い褐色土である。

本調査においては、上記のV層まで掘り下げており、石棺は第II層からVI層間に構築されていた。

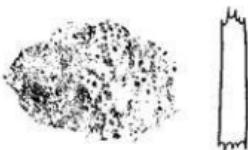
5. 調査の結果

蓋石は黒褐色の表土(20cm)を剥ぎ、赤ホヤを露出させた段階で検出された。石棺は現赤ホヤ面から深さ40cm、長さ215cm、幅70cmの長方形土壇内に構築されている。堀り込みは南面(頭部)において急角度に掘りこまれ、北面(足部)はやや緩く掘り込まれており、土壇内埋土は粘性の少ない黒褐色土に赤ホヤブロックを含むやわらかい土壤である。頭部の蓋石上部付近の土壇埋土中から^は4×6cmを測る土器片一点が出土している。これが本調査における唯一の土器片である。土器は壺形土器の胴部片とおもわれ、器厚7mm、色調は外面橙色(Hve2.5YR7/6)、内面にぶい黄橙(Hve2.5YR7/3)を呈し、胎土に砂粒(1.0~2.0mm)を含み、他に石英粒、黒色のガラス質粒(1.0~2.0mm)を含む。器面は風化して調整等は残っていない。土壇埋土中とはいえ、表層からの出土でもあり、周辺からの流入の可能性も多分に考えられる。

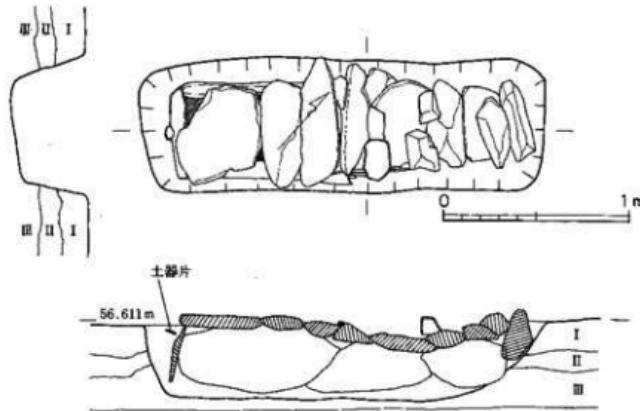
石棺は主軸の方向をN48.5°Eにもち、頭部を南西に向けている。蓋石は大きいもので50×45×8厚を測る合計9枚の板石より構成されるが、耕作による変動がみられ、二つに割れているもの、あるいは90°回転しているもの—頭部直上の蓋石。(佐藤氏が掘り出して再び埋め戻したもの。)—がみられる。重なった状態をみると、石棺頭部より順に足部に向って被せている。

棺身は両脇に3枚づつの板石を並べ、前後をそれぞれ1枚の板石で囲んだ計8枚からなる。最大幅は頭部付近にあって55cm(棺内側)を測り、足部にゆくにしたがって狭ばまり足部端では僅かに24cmの値を示す。足部幅は耕作等による左右からの圧迫により極端に狹隘になつたものと推定されるが、おそらく埋葬時点においても幾分足部に向って狭ばまっていたものと考えられる。棺床面には底石、粘土床等の配慮ではなく、第VI層をそのまま床面としている。棺身に組まれている石材は蓋石と同様軟質凝灰岩であるが、切石というよりは割石といったほうが適当なもので、角をもたない。それは切り出した石材を打ち欠いて適當な大きさにした後、多少の板状加工を施した木葉状の丸味のある形状であり、切石を用い箱型に組まれた典型的な石棺身に比較して、簡易な印象を免れないものである。

棺身内は黒褐色土(赤ホヤ極小ブロック含む)がいっぱいに詰り、副葬品、遺骸は検出されなかった。

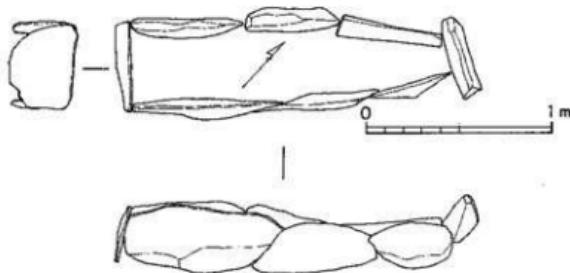


第3図 出土土器実測図(1/2)



I層 第一オレンジ(赤ホヤ) 茶色糸状斑がある
 II層 黒褐色ローム 粒子緻密で粘性大
 III層 茶褐色ローム #
 IV層 棕褐色ローム 粘性大
 V層 黒褐色ローム(粘性小)に赤ホヤのブロックを含む 土壌の埋土である

第4図 石棺実測図(蓋・土壤) 1/30



第5図 石棺実測図(身) 1/30

6まとめ

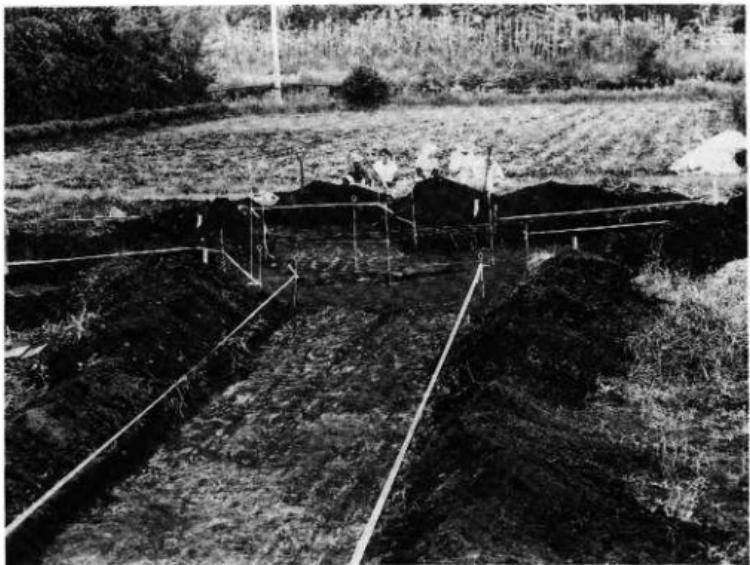
県北地区は石棺の発見例が多く、北は海岸部の熊野江、浦城から市内の東海、煙山、岡富、⁽¹⁾南方の諸地区をはじめ、西に高千穂町、南は西郷村から日向市美々津に及んでいる。なかでも、南方地区から出土するものはこの地区特産の凝灰岩が多用されて、千枚岩を用いる地区と対照をなしている。さて、本遺跡出土の石棺から最も近距離にあるものは、北約100mにある18号墳の主体部となる箱式石棺であるが、これは硬質の凝灰岩を四角形の切石として箱型に組み、しかも現在の地表面より上位にあって墳丘を有していたことが歴然としている。

土壇内に構築された同類のものとしては、昭和52年に調査されすでに報告された赤木地区的石棺に類例を求めることができるが、これは四角形状の板切石6枚を組んで棺身を形成し、蓋石は2枚構成で繩掛突起を造りだす典型的な形状をしている。これに対して当遺跡の石棺は以下のような事項を列挙できる。

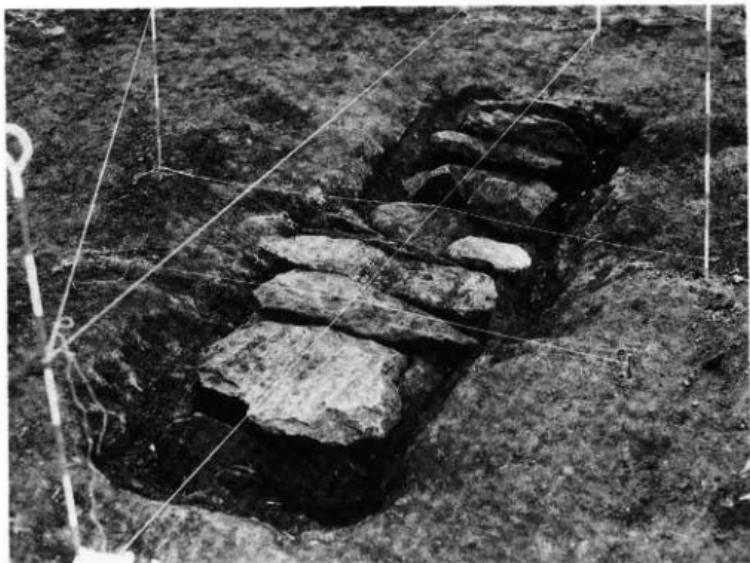
- 身は軟質の凝灰岩を木葉状に加工して箱型に組み合わせている。蓋石は9枚の板状石からなるが、加工は身に比べてさらに簡略である。
- 石棺は土壇内に構築され、床面に床石等の施設をもたない。
- 周囲に周溝等の施設を伴わない。マウンドについてはその有無の確証を得るだけの条件を現状では喪失している。
- 副葬品については、盜掘等の可能性は考えられるが、蓋石の耕作による変動を考慮しても、当初から副葬されなかった可能性のほうが高い。

以上、多々羅遺跡の石棺は南方古墳群内でこれまで検出された例にもれず、凝灰岩を石材として箱型に組み合わせるものであるが、その石材は簡単な加工を施すにとどまり、床石を設げず、副葬品を伴わない等、極簡便、素朴な造りという印象を払拭しがたいものとなっている。このことは弥生時代にさかのばる可能性を示すものか、あるいは古墳時代であってもより下層の被葬者を想定すべきかの折衷が考えられる。

- 注(1)石川恒太郎 「熊野江横石塚第6号発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第22集
1980年宮崎県教育委員会
- (2)石川恒太郎 「延岡市友内山箱式石棺調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第16集
1972年宮崎県教育委員会
- (3)石川恒太郎 「延岡市煙山古墳群調査報告書」 1971年旭化成工業株式会社延岡支社
- (4)石川恒太郎 「丸山石棺群発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第21集
1979年宮崎県教育委員会
- (5)岩永哲夫 「鳥の巣箱式石棺発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第21集
1979年宮崎県教育委員会
- (6)岩永哲夫 「赤木箱式石棺発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第21集
1979年宮崎県教育委員会



発 墓 状 況



石 棺 全 景

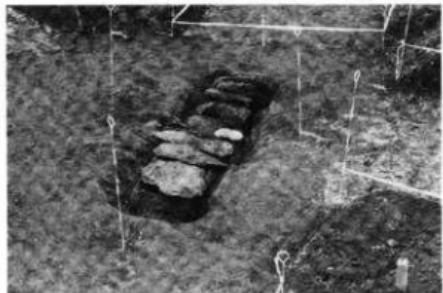
図版(2)



1. 蓋石の状況



4. 蓋石(頭部)



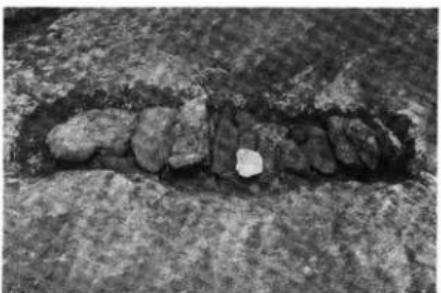
2. 石棺全景



5. 石棺全景(頭部より)



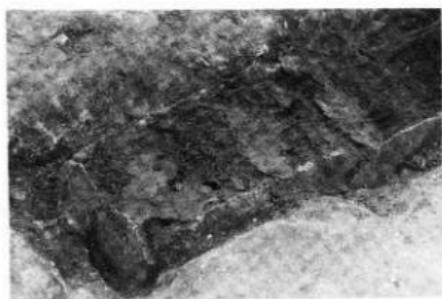
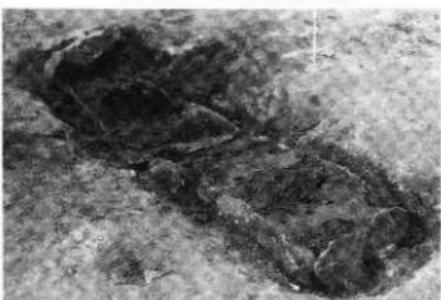
3. 石棺とりあげ状況



6. 石棺全景



2. 蓋石をとり上げた直後の状況



1. 石棺とりあげ状況



3. 棺内精査後の状況

延岡市文化財調査報告書Ⅲ

昭和62年3月31日

発行 延岡市教育委員会
延岡市東本小路2-1

印刷所 安井株式会社
延岡市別府町4432-1
TEL (33) 3385